



第1章 入所者・退所者及び家族からの聞き取り



『入所者・退所者及び家族の声』を お読みになる前に

ハンセン病療養所入所者やその家族達は、いわれの無い偏見や差別により、筆舌に尽くしがたい苦勞を強いられてきました。その原因はハンセン病に対する社会の誤った理解や、国が行った長期にわたる隔離政策によるものです。

この章では、「入所者・退所者及び家族の声」として、ハンセン病療養所入所者・退所者ならびに家族の体験談を掲載しておりますが、内容を正しく理解していただくために、ハンセン病やわが国の隔離政策の歴史などについて、あらかじめ解説します。

1 ハンセン病とは

ハンセン病は、らい菌によって引き起こされる慢性の感染症です。らい菌の病原性はきわめて弱く、仮に感染が成立しても発病にまで至る例は非常に少ないと考えられています。感染や発病には、その人の持つているらい菌に対する免疫力、その人の栄養状態や取り巻く環境などが大きく関与することが分かっており、現在のわが国のような衛生環境・経済状態のきわめて良好な社会においては「ハンセン病はもはや感染症としての様相を呈せなくなっている」ということが言えます。事実、わが国の新規患者発生は2000年以降も毎年数例認められているだけです。しかし、感染が成立してしまうと、らい菌は抹消神経や皮膚で徐々にではありますが増えつ

づけ、その結果さまざまな症状が現れます。たとえば、運動麻痺とか知覚麻痺などは末梢神経がおかされた結果であり、皮膚には皮疹（斑紋）や結節（こぶ）が現れたりします。現在では、遅くともこの程度の症状で診断が下され治療が開始されるため、これ以上、症状の進むことはまずありませんが、治療法の乏しかった過去においては、らい菌は咽頭、鼻腔、眼などをおかし、さらに内臓へ病変の及ぶこともありました。すなわちハンセン病は第一義的には皮膚と末梢神経の病気なのですが、総じて言うと結核と同じように全身性の病気ということができます。ここできわめて大切なことは、らい菌の感染だけで人はまず死にません。治療法の無かった時代でも、らい菌の感染のみでは、ほとんど死に至っておりません。言い換えるとハンセン病は決して「死に至る病ではない」ということです。

治療法も1943年にプロミンという特效薬が報告されて以来、次々に良い薬が開発され、現在ではリファンピシンを中心に3ないし4種の薬剤を組み合わせる多剤併用療法（MDT）が広く行き渡っており、よほど診断が遅れない限り、後遺症を残すことなく治癒させることができます。

2 ハンセン病が恐れられてきた理由

ハンセン病が恐れられた理由の第一は、病気が進行してしまふと、時として身体に残ってしまう高度の「変形と機能障害」です。末梢神経がおかされることにより、顔や手足の先から、独特の変形が始まります。これに皮膚の症状も加わったことが、この病気を排除の対象に追いやったといえます。

これは、らい菌の至適増殖温度が33度と低く、体温の低いところ、すなわち衣服に覆われていない部位（手足の先や顔、頭など）で好んで増殖する性質によつています。

第二は、患者が同一家族内に現れることが多く、遺伝病と考えられたことです。この結果、ハンセン病患者が一人でも出た家系は「らい筋」と呼ばれ、差別の対象になってしまいました。また、いろいろな宗教が天刑病であるとか業病といった概念でこのことを捉え、偏見の対象として扱ったことも、ハンセン病患者にとつては不幸なことでした。わが国でもハンセン病が感染症であるということがわかつて、それまでの遺伝病という概念が抜けず、二つの相反する概念が同時に長い間存在しました。

さらに、これに追い打ちをかけたのが「らい予防法」です。「らい予防法」の中に隔離が規定されていたため、この病気は「隔離が必要な程強烈な伝染病」であるというイメージを与えました。また、患者をハンセン病療養所に収容する時には犯罪者のように扱い、警察官がこれに直接関与したことも、ハンセン病が非常に恐ろしい病気であると、社会一般に誤解を与えました。戦後は、警察にかわり保健所が隔離にかかわり、家が真っ白になるほど消毒を行うなど、保健所も警察が関与したのと同じように誤ったイメージを与え、偏見・差別を助長したといえます。

その他にも、ハンセン病に対して効果のある薬の発見が遅れたことも、この病気を恐れさせた原因の一つです。

3 聞き取りの実施方法及び表記等

平成15年11月から平成16年2月にかけて、療養所入所者の居室を訪問するなど、入所者、退所者、そのご家族と直接面談して、聞き取りの内容をテープに録音しました。

「入所者・退所者及び家族の声」では、実際に協力していただいた方の生の声が反映されるよう、録音したテープの内容をできるだけそのまま文章化するよう心掛けました。

聞き取りに協力していただいた方の氏名・年齢については、ご本人の申し出により記載し、地名・地域など個人の特定に繋がる内容は、プライバシーに十分留意して掲載しました。

病名の表記については、らい予防法の廃止後は「ハンセン病」に統一することとなっていますが、ご協力いただいた方の心情が伝わるように、できる限り発言内容はそのままにし、「らい（癩）」「レブラ」という言葉を使用したところがあります。

また、ハンセン病の病状や障害などについても、現時点では適切でないと思われる表現がありますが、聞き取りに協力していただいた方が、当時の偏見・差別意識を描写するために過去の発言などを用いたと考えられますので、あえてそのままの表現を用いた箇所もあります。

4 用語等解説

「入所者・退所者及び家族の声」の中に出てきたハンセン病用語（文中の用語の右肩に※1～※37を付記）については、「用語等解説」の中で記載しました。

すべての望みを捨てよ

長島愛生園 阿部 はじめ さん（79歳／男）

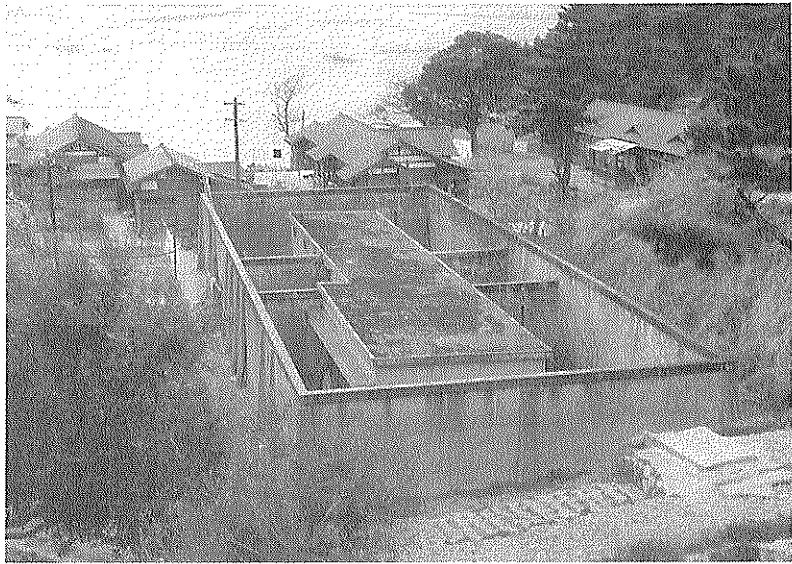
「この門をくぐる者汝すべての望みを捨てよ」

これはアメリカにあるハンセン病療養所の門に掲げられた言葉だそうです。これまで私の歩んで来た道は、この言葉に言い尽くされているように思います。

私の家族は岡山県の山奥に住んでいて、私だけ学校があったので、神戸の叔父の所に寄宿していました。顔がむくんで頭の毛が薄くなり、「12、13歳の子が毛が薄いのはおかしい」と言われ、近くの診療所に行きました。父親が神戸に来た時に私の変わり様に驚き、県立病院に行き、その後「阪大病院に皮膚科の専門のところがあるから行ってみる」ということで、父親に連れられて行きました。阪大で病気の宣告を受けなければ、子どもですから怖いとか、シヨックということはなかったです。その後、岡山の方に家族が引っ越したんですがね、県のほうに届けがありました、あの頃癩予防法で、3日以内に行政官庁に届けなければいけない」という法律がありましたから、県のほうから警察を通じて、あの頃は警察官が来ました。警察の人は目立たない形で「愛生園に行つた方がよい」と、父親に話をしていました。私は長男でしたから、父親のシヨックはかなりのもんだつたと思います。父親は暗い顔をしていました。母親は気を遣ってオロオロする

ばかりで、みんなが辛い思いを我慢しておつたと思います。愛生園に来るまでの半年間は岡山におり、愛生園から迎えのハイヤーが来ました。同じ集落からあと2人、同じ病氣の人がいたので、3人で愛生園差し回しの車に乗り、父親と4人、明け方の暗いうちに出て、夕方、片上かたかみに着き、そこから小さな漁船に乗り、波しぶきをかぶりながら園に向かいました。不安な状況の中で、どこに連れて行かれるか分からないという気持ち先立って、怖い、恐ろしい、不安の中で愛生園に来ました。私が愛生園に来るようになったのは、家族としては守りきれんから療養所に行つてくれ」ということだったと思います。当時は、四国遍路、草津温泉、療養所、と3つの行き先があつたんです。草津は有料ですから行けるような状態ではないんで、やむなく愛生園に入るように父親が決め、父親に言われるままに来ました。

入所してすぐ、収容所せうようじょに入りましたが、病氣の重い人が居ましたからね。だから子どもながらも大変な病氣になつたんだな…と感じました。1週間後、子ども舎に行くことになり、子どもがたくさん迎えに来てくれました。仲間がおるんだなと思つた。安心感でしょうね、あれは。子ども舎には4歳から18歳くらいまでの子どもがいました。4つの子という



園内生活で、ひと際
重圧的な存在を示し
ていた愛生園のかつ
ての監房（長島愛生
園自治会提供）

のはお母さんと一緒に来たんですけれども、あんまり小さく
て泣くから、職員の方が「可哀想だ」と言って、1年間母親と
子どもで生活してもいいということで。母親は健常者でした
けれども1年間子どもと一緒に生活して、5歳になったら帰
りました。でも、まだまだ泣くんですよ。そんな情景を見とつ
たら「可哀想にな」と、私はちょっと年長者でしたからね、
自分のことは思わなかったけれど、可哀想だなと思いました。
昭和18年頃、父親から手紙が来ました。「満蒙開拓義勇軍
に行けないか」ということで。あの頃、満蒙義勇軍というの
がありまして、どんどん満州へ新天地を求めて行ったんです
よ。大陸に行ってお国のために働こうと。父親としては「あ
んたのところの息子はどうしたんや」と聞かれたら「うちの
息子は満州に行っておるんだ」と胸を張りましたのでしょ
う。ここから出られないことを知っていなかったから、父親
もこれで、私がここから出られないと分かったのでしょうか。
子ども舎に入って私は事務所の雑役の仕事をあてがわれま
した。子どもにも作業がありました。農芸とか洗濯、裁縫と
か。青年舎に入ってから農芸とか重病入付き添いの作業
をしました。相互扶助ということで元気な者が不自由な者や
病人の面倒を見るのが同病者としての思いやりではないかと
ね。いずれ自分が不自由になったら見てもらうほうだからね。
これは義務で、病室付き添いの当直は24時間勤務で12ベッド
の世話をするんです。重病になれば看護婦が来ます。医者は

臨終間際に来て死亡時刻を知らせるだけです。知り合いを呼び、湯灌をして解剖室に運び、火葬場に送ります。みんな患者作業です。みんな「一生ここで終わるんだ」と思っていましたから、無理しても作業をしました。

特效薬「プロミン」が出るまで、この病気は発病して15年の命だと言われていました。戦時中は日本中が大変だったと思うけど、ここは療養所とは名ばかりで強制収容所でした。自給自足の患者作業で治療や食事をはじめ、人間生活に必要なものはすべて患者が賄い、職員は監督でした。職員の態度は横柄で、「お前ら非国民だ」「穀潰しだ」ということを言われましたが、誰一人反発する者はなく言われるままでした。だけど、私たちは無為に過ごすのではなく、何か役に立つことをしたいという思いがあつて、重労働に耐えました。一番きつなのは、松根油製造でしたね。「お前たち、何か国のお役に立つことをしてみよ」と言われ、松根を掘ってそれを切り刻んで釜で蒸留すると、B29を撃ち落とせる油がとれるということで、元気な者を現場に住み込ませ、昼夜を分かたず突貫作業がありました。あとで、広島軍管区の方から表彰状を貰いました。患者全体が体を傷めました。

昭和21年には断種手術を受け、結婚しました。「これで安心した」と母親が喜んでくれました。36年に私は菌検査で陰性になりましたが、その時母から手紙をもらいました。「お前たちも病気が良くなって外に出られるようになったらしい

けど、家の近くまで来てくれるな。お父さんも死んでお前を家に迎え入れることもできなくなった。その辛い気持ちを分かかってほしい」と。私は母の立場を理解しましたし、別に恨みませんでした。その母が死んだ時、後見の叔父が「明日出棺する。お前、顔を見たからうから来んか。私がついてやる」と電話をくれました。嬉しかったね、こんな電話をもらったの初めてで。家族とか血の繋がりの一番感じた電話でした。そんな電話をもらったことがなかった。ここに65年おられますけど、家に帰ったのは2回だけ。親身に感じた電話は1回だけです。

今は、ただ家族のために、家族に迷惑がかからないように過ごして来たような気がします。それが、自分の生きてきた甲斐のようなもので。家族のために、家族の迷惑にならないようにここでおとなしくとつたようなものです。家族には会えない状態が続いたけれど、当時幼かった弟が、自分には兄がいるらしいということを知って、探し探し、あちこち当たって愛生園にいることをつきとめて、会いに来てくれました。毎年正月に内緒で会いに来てくれます。歳をとるたびに家族のことを恋しいと思うようになりました。

今になって、しみじみ強制隔離で自分たちは家族バラバラになったのだと思います。家族関係を断ち切られたこと。この大きさを痛切に思っています。社会復帰の話がありますが、これも今になっては遅い。40〜50年遅いですね。私はここを

死に場所だと思っていますよ。この平均年齢は78歳で、私は79歳です。在園平均年数が50年を過ぎました。ここで50年も過ぎたらどうしようもないです。もう行く所がありません。ここで一生過ごすための段取りが組んでありますからね。納骨堂も恥ずかしいくらい立派なのができましたしね。社会復帰するなら、あんなのは要りませんよ。引き取りがあるんならね。皆、最後の場所だからとお金を出し合って作ったんです。皆、ここに骨を埋めるつもりでおるからね。

社会復帰の妨げになる原因はいろいろありますが、患者自身にもあると思います。何でそんなに卑下しなくてはいけなかったか、ということです。冷たい目で見られるから隠そうとした。自分自身に偏見があった。今頃やっと平気になってきたからね。堂々としておいたら偏見なんて何ともない。乙武（洋匡）さんの姿を見ると、圧倒されます。胸を張らねばと思います。こちらの態度次第だと思ふようになりました。

私が結婚したのは昭和21年のことで、妻の父親、弟、甥もこの病気にかかっていました。妻は鳥取の出身で、実家は義母が一人で守っていました。義母は毎年面会に来てくれていたし、我々も農繁期に鳥取に行っていました。素晴らしい義母さんで、我々のことを近所に隠さなかった。近所にもハンセン病にかかった人がいたので、土地柄があったのかもしれない。家を守り、我々を待っていてくれました。「友だちも連れて来い」と言ってくれました。嬉しかったです。

今、私が願っていることは、我々のような病気の差別は御免こうむりたいけど、自分よりちよつと変わったものとかを受け入れようとする差別・偏見がありませんね、ハンセンに限らず。そうした人たちを受け入れる日本人の人権意識のレベルアップというのか、障害者がいたら優しくしてあげるような広い心が欲しい。そして、将来この愛生園がターミナルケアなどの場所に活用されると良いな””と思っています。



長島愛生園の居室風景
(太田順一「ハンセン病療養所百年の居場所」解放出版社より)
*写真は阿部さんの居室とは異なります

仕事で芽生えた心の解放

長島愛生園 岡山 幸枝さん（71歳／女）

あの頃は強制収容が多かったようだけれども、私の場合はちよつと違った。入園したのは昭和26年3月。今でいう18歳でした。だから入園してからもう52年…早いもんです。

私の父親もここに入園していて、昭和18年の時かな…、父は強制収容で来ています。夜の9時過ぎやったかなと思いません。私らは「送りに行かんがいい」ということで送りには行かなかつたけど、県のトラックで連れて行つたっていう話じゃつたわ。役場が通報したんでしようね。患者が出ている家はすぐ分かるからね。

父は入所した年の秋に、「帰らしてくれ」言うて大分頼んだんでしようね、あの当時の事やから。それで一時帰省で帰つてきて、そしたら今度は、当時の長島愛生園の状況がひどかつたんでしようね、「もう行かん！ 園に帰らん」言うて。そしたら県の人やら警察やら役場の人やらがよう来てたわ、「来い！ 来い！」言うて。私はその時もう体に症状が出かけとつたから、県の人らが来たら逃げ隠れしとつたんよ。結局父の事は、「もうそんなんなら、家の中におらんと部屋を別にせい。そうするんなら、これでもええわ」ということになつて、うちの真向かいに部屋がありますから、父はそこで生活していました。死ぬまでね。ご飯を食べる時には一緒に食べ

るんだけれども、寝起きはその部屋でね。

この病気が出ると、通学時の子どもに嫌われたりね…その家の前に来たたら、子どもらが鼻つまんで通つたりしとるもんね。私も知らんから同じようにしとつた。学校の行きがけにある家がこの病気の家じゃつたから。自分の親がそうじゃいうことも知らんかつたからね。皆と同じようにそうして通つたんじゃもの。それが今度は自分が病気になつて。父親が入園してからの、百姓の手助けをしなくてはいけないこともあって、小学校を高等1年で辞めて、青年学校に行きました。青年学校は毎日じゃないから、週に1、2回くらい行つたかな。その時はまだ眉毛が抜けていませんでした。確か18歳ぐらいから眉毛が抜けたと思うから。それまでは知らない顔をしているわけ。学校では皆とも、なんともなしに行つてたんやけども、ある日学校で青年大会というのがあつてね。その時に皆が私の傍から逃げたらしいわ。それを親戚の子が見とつて「幸枝はもう他へ出したらいかん。可哀想じゃから、だから行かさんようにしてくれ」いうて母親に言いに来て。それである日、近くの叔父に「愛生園に行こうじゃないか」いうて誘われて、それで来たんだけれどもね。

入園してからは、同じ村や近くの村からたくさんここに来

てたこともあって、あの当時はそんな寂しい気持ちはなかった。やっぱり「故郷の人がいる」っていう気持ちがあった。

園では園内作業もあったけど、昭和31年にローマ会議が開かれて、それでその翌年に園長が交代し、35年には国が社会復帰基準を決めた、「1年ないし2年菌が出なかつたら社会復帰してもいい」と。そういう風になってからは、園も労務外出というて、外に働きに行くのは暗黙の了解だったの。それで37年頃の冬に、「大阪のみかん工場で働かんか？」という話が出てね。夫は園で留守番でした。楽しかったですよ。

ご飯も競争で、丼鉢いっぱいご飯入れて、おかずも早い者勝ち。園からは7、8人行ったんだけど、結局最後まで勤めたのは私を含めて3人。おっとりした人とか勤まらなくて帰った人もおるから。もう全然こっち(園)のことも忘れてしまつて、あっちの方と話ばかりして。楽しかった。若かったからね：30歳ぐらいでした。その後、41年に愛生園が園内に授産施設を作ったの。将来社会復帰する者を訓練するということで。それで夫と2人で申し込みました。それは菌陰性10年以上、それで障害がない者で、将来社会復帰を志す者：を条件に園が募集したの、10名。主人は3年ほど勤めて胃潰瘍になって辞めたけど、私は最後まで勤めました。7年間でした。最後は2人しか残らなかつたですね。やっぱり次々と体調を崩して辞められました。その時に初めて1日8時間仕事をしたんだけどね。朝8時半から晩5時まででしょう。ここの通

常の園内作業はそんなに長い時間仕事してないから、続かないのよね、皆さん。私は昔から百姓人間じゃから、そういうことは当たり前で仕事しとるから続いたんだと思うけどね。賃金は、あの頃で月7500円。園内作業の賃金の3倍だった。あの時の私の収穫というのはね、お金だけじゃなくて、自動車でイグサを積んで来る運転手さんとか、それから、出荷したのを取りに来る問屋の人とか、技術を教えてくれた倉敷のご夫婦などとか、そういう健常者の人と知り合えたというのがうれしかったです。「病気は治った。健常者の人と一緒に話をしても、どこへ行つても大丈夫だ」という気持ちですが、その頃から芽生えました。



岡山さんが働いていた頃の愛生園の畳工場(授産施設)。現在は、工場の場所も移転し、職員の手によって畳が作られている

隔離からの解放

長島愛生園

M・Iさん（67歳／男）

10歳の時、行き慣れた小さな床屋に行つて順番を待つていたら、横にいた50歳前後の人が自分のことを気持ちが悪くらい、なめ回すように見るんですよ。その人に「家はどこ？」と聞かれ、散髪を終えた後「家に案内してくれ」と言われたので、そのおじさんを連れて帰りました。後で分かったことですが、その人は衛生警察官でして、ひよつとして『らい』じゃないか、と直感的に感じたんでしようね。入所した頃の写真を見ると、顔が少しむくんで、血色もどす黒くて良くなかった。衛生警察官を家に案内して、両親と話し合い、4、5日して医者が来ました。記憶が定かではないのですが、長島愛生園に勤務している医者が来たんだと思います。「らいだから。その専門の療養所があるから」と言われ、愛生園に来ることになりました。その頃の症状は手を触れただけで頭皮がヒリヒリ痛んだのと、両足が完全に麻痺していました。足の向こう脛すねに大火傷をしたんですけど、そんなひどい火傷をして知らん顔をしていたもんだから、私以上に両親はショックを受けていました。だから知覚麻痺ちかくまひから始まつて、火傷して、床屋さんで怪しまれて、怪しまれたとおりらい患者だったということになりますね。家に来た医師はありきたりの言葉で「すぐ治るから」と言いました。治療は療養所に行かな

いと受けられないということが大前提にありましたから、らにかかつて治療を受けるには療養所に行かなくてはならない。1年か2年すれば治るといふ風に、言葉巧みに言われて私も入りました。1、2年すれば帰つて来られると120%信じきっていました。島にある療養所だから、釣りでもしてと、非常に楽観的な、むしろ治療に120%の希望を託してきたような状態でした。専門の療養所だからすぐ帰れると思つていましたが、父は「永の別れになるんじゃないか」という思いをどつかに持つていたようです。家を出て行く時に、父は「顔を合わすのが辛い」ということで、部屋の隅の私の分らない所に隠れてしまつて、別れの朝食、最後の食事はおふくろと2人でお膳で向かい合つて食べました。それでおふくろが最寄りの駅まで送つてくれました。

岡山駅に着いたのは昼頃だったのですが、列車から降ろされたのは真夜中でした。人で込み合った駅のホームにらい患者が降りるといふこと、この駅のホームにらい患者が居るといふことが、一般の人たちの目に触れることになれば大変な騒ぎになるだろうといふことは先刻承知で、それを避けて人気がない夜中に、ということが大体考えられますよね。駅前の小さな広場の片隅にトラックが停めてあつて、荷物を放り

込むみたいにとラックに乗せられた、積まれたというか。そういう扱いを受けました。患者専用棧橋には午前3時頃に着いて、収容所に連れて行かれ、早々に裸にされて、それで渡された番号札を胸に持って写真撮影です。囚人ですよ。その後持ち物を全部持って行かれて、その翌日返されましたけど、財布を開けてみるとお金がなくなっていて、園内通用の愛生園の通貨が入っていました。「愛生園の中で何でも買えるお金だから」と言われ、素直に納得し別に怒りとか感じずにいきました。

昭和20年前後からは隔離がきつくなり、私の入所した21年は強制収容が盛んな時でした。強制収容して患者を入れたら、後は蓋を閉めるように療養所から一步も出さない、という構えが当時の政策で、園内通貨は足止めのためのものでした。逃げ出してもお金がなかったらたちまち困るだろう、ということとで発行したんですよ。患者管理をしていく上で、一番決め手になるのじゃないかというのは「お金を持たさない」ということです。しかし、園内通貨にも裏口があつて、日本のお金を隠し持っている人がいるわけです。そういう人に自分の衣類とか物を買ってもらつて日本のお金で払ってもらつたり、両替をしてもらうんです。巧みな人が何人かいましたね、そういうのが耳に入ってくると聞取引きをするわけです。逃走は「決死の覚悟」と言いますけど、正に決死ですよ。成功する人、途中で命を落とす人、あるいは途中で…、途中というよ

り長島を一步か半歩出た瞬間に捕まってしまう。捕まると逃走が一番重たい罪ですから、1ヵ月、あるいは1ヵ月以上、監房に投獄されるわけです。鉄格子の中では1日1食、握り飯1個、小さな湯飲み茶碗に水が1杯と、非常に厳しかった。しかし、死ということも、監房に入れられることも覚悟の上で逃走を図る人は結構いました。それだけ園が厳しかったんです。

私が収容された昭和21年は、戦争が終わつて1年経つた頃ですよ。日本の復興はまだまだこれからという厳しい、貧しい日本になっていましたよね。療養所は、治療は第2、第3くらいに、後ろの方に置かれてしまつて、「本当に療養所だろうか」と疑わしいようになっていた。16年くらいから治療はまともに受けられないし、まともに食べる物もないという事で、自給自足が始まつていくわけです。十分な栄養が摂れない一方では園内作業に拍車がかかつてきて、「どんどん、どんどん働け、働け」という形になってきたんですよ。結局ね、療養所に来たけれど、まともな治療が受けられないところに、毎日牛か馬のように「作業だ、作業だ」と駆り立てられる。それで仲間同士でも、非常に元気な者と不自由な者との格差が生まれてね。働けばわずかばかりの賃金が手に入る、働きたくても働くことのできない不自由な体の弱い人は賃金は金くなし。ということになると、片方はタバコを吹かし、もう一方はタバコを買うお金がない。入所している者に格差ができてね。だから自分の命を削りながらで



「朽ちた棧橋」—患者収容棧橋(長島愛生園)— 撮影/M・Iさん

も仕事に精を出すというように管理されていたわけですよ。周りを見たら、病気を悪くさせる人たちがいっぱい居るわけですよ。それで、「同じ死ぬのならばここで死ぬよりも外に行つて死んだほうが良い」という思いに駆られて、逃走が後を絶たなかったわけです。

一番の問題は「人間として扱われていなかった」ということにあります。公民権が戻って来たのは、私の入所した昭和21年なんです。らいになった者は非国民扱いですよ。罪人でもないのに、病気になっただけで公民権剥奪でしょ。合点がいかないというか。人間は人間でも罪人扱いというか。この園内でも、例えば、職員と入所者の間というのはものすごい人間的な格の違いがあるんです。いかに人間として扱われていなかったか。患者は惨めなものですよ。同じ人間同士であるのに片方はたまたま病気になり、片方は患者の世話をすゝる、管理するという立場だけで、すごく上下の差がありました。目には見えないけれども、「ここからこっちは勝手に入つて来てはいかんぞ」ということで、『職員地帯』、『患者地帯』という目に見えない線がありましたから。そういうことで、今いうところの人権もないし、人格というのも全く無視されて扱われていたということです。『どうせ死ぬんだつたらまともな人間として死にたい』という思いから、死を覚悟の上で逃走して行く者がいてもおかしくないですよ。逃走以外にも博打、盗み、思想的な書物を持っていても、懲戒^{第10}検束で監房に入

られました。ひどいのは態度がちよつと生意気で、何かと
いうと職員にたてつく、という場合にも入れられました。

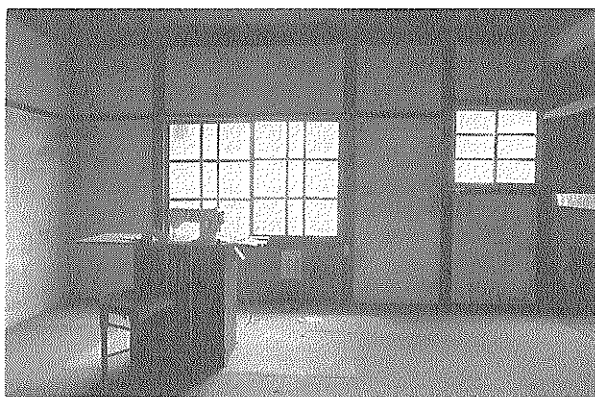
結婚条件に断種手術が強制され、女性が身籠つたら墮胎さ
せるということも非人道的な扱いといえます。決め事を破つ
たんだからということでも一方的に子どもを墮させせる。「発見
が遅くて8カ月、9カ月前くらいに大きくなつていても、赤ん
坊の頭に産毛が生えているような状態でも、手術して絶対に
子どもを生ませない」という事が国賠訴訟の裁判の中でよく
言われたんだけど、管理そのものはそういう断種と墮胎とい
うことにも象徴されている。私に言わせると、園内通貨を出
したのと同じように、すべてが隔離に徹底した管理ではない
かと思えます。結婚はとにかく「子どもを生むことはできな
い」ということで結婚を許可した。その結婚をした人たちが
どのように扱ったかという、先住者のひと組の夫婦がいる
6畳1間に新婚さんを入れて同居させる。ひどい時には3組
の夫婦、4組の夫婦がひと部屋に入ったという記録が残って
いるわけですよ。夫婦で暮らす部屋がない場合、結婚を希望
しているカップルに対してどうしたかという、許婚のよう
な関係で、「施設が認めれば、夜、女性のところに通つてもよ
ろしい」ということで、通い婚という形をとった。こういう扱
いもすべてが管理第一でもって、逃走を防止するんだという
手段ですよ。結婚して2組も3組も放り込んでいくという
のは、豚と一緒にですよ。療養所の治安上、乱暴な男でも

結婚すればおとなしくなるだろう」とか、「博打好きな者も
慎むだろう」とか、そういう意図がね、結婚を許可した精神
の中に含まれていたのではないかと、私は思います。

ちよんど、らい予防法の改正・廃止を巡って厚生省でやり
取りをしている頃、平成5年から7年まで私は全患協にいた
んです。入所者の中には「あの悪法が廃止になることが結果
的に不幸を招こうが、窮屈なマイナスのものになつても、
悪法が廃止になつたらそのくらいの事は覚悟の上だ。あるよ
りも廃止になつたほうがいい」と言う人もおれば、「療養所
の存在はどうなつていくのか、今までの処遇とか待遇はどう
なるのか？」と心配する声もありました。らい予防法の根幹
は何かといえば、『強制収容・絶対隔離』です。出口のない
法律と言われてきました。入れても出すことのない法律で、
これまで目に見えない鎖で縛られていたわけです。目に見え
ない鎖ですから、解かれても一般の人の目には見えないわけ
ですよ。だけでもいざ廃止されると、当事者にとっては、縛
られていたものがなくなったという解放感はとても大きかつ
た。人間らしく扱われるということで、らい予防法の廃止の
意義は、私だけでなしに、多くの入所者が感じたと思います。
同時に、15年前に邑久長島大橋が架けられたでしょ。陸続き
でない島だから、島流しにされたように感じていたから、他
の療養所のない解放感を味わうことができました。正に「隔
離からの解放だ」という風に感じました。

ているのは火傷ですね。お料理作ったりなんかした時でも、鍋に当たっても分らないことがあるんですよ。これは熱いんじゃないかな」と思えば、乾いた布巾などを持つたりしてとか……。熱いと思った時にはもう随分腫れて、あとで水ぶくれになつてゐるから、「あれっ」と思うことがあります。縫い物するにも手先に力が入らないから針に糸を通すのがなかなかうまくできなかつたりとか、紐を結んだりとか、そういう細かいことができにくいですね。洗濯物を干す時に洗濯バサミがあるでしょ、あれがうまくはさめなくてピンと飛ばしたりとか、そういう細かいことがちよつと苦手です。それからちつちやなもの、例えば、ジャガイモとかサトイモとか、皮をむく時も、飛ばしながらすることが多いです。リンゴのように大きいものならまだ良いんですけど……。傷すると段々、手の感覚もなくなってくるし、手も不自由になつてくるので火傷とか傷に対して十分注意をするようにしています。

最近、県とか市町村とかが呼びかけて下さつて夫が話（講演）をしに行くと、皆さんが熱心に耳を傾けて下さる。もし、これが立場が反対で、私がこの病氣になつていなかつたら、呼びかけた講演なんかに足繁く通つて話を聞くだろうか。と思うと、やっぱり皆さんのそういう仕事に対して感謝します。もし私が健常者であつたら、どちらかといえば知ろうとしない、聞きたくないということで無視してしまう側にいるかもしれない。そういう態度をとるんじゃないかと思うと、



長島愛生園の女子独身寮（太田順一『ハンセン病療養所 百年の居場所』解放出版社より）。10歳で入所したN・Iさんも女子独身寮で過ごした時期がある

「本当にありがたいな」という気持ちで湧いてきます。小さい時から隔離された中で生活していますから、社会に馴染もうと思つても、どことなく一歩退いた、遠慮したような形になつてしまいます。「さあ、今すぐ堂々と社会復帰して生活しなさい」と言われても、こつちが卑屈になつてゐるんですね。だからそんな事も分かつてもらつて、愛生園から来たからとか、ハンセン病の人だからといつて区別するんじゃない、普通の人と同じように生活ができるようになったらそれが一番良いかな、と思つています。

母と来し恋愛道路

長島愛生園

T・Iさん（68歳／男）

「まあ、あんたやったら早いこと（療養所に）行けばなんとかなるだろう」と言われて「すぐに行かしてくれ」と言いました。行く方法を聞くと「ちよつと待ってくれ」と言われました。一斉収容があるでしょ。兵庫県の患者を集めて、日にちを決めて運ぶ日があつたんですよ。「半年ぐらい後、来年の4月に行く機会があると思うんでそれまで待ってくれ」ということでした。「出来るだけ早く行きたい」と言うたんですけれどもね。それで「学校は休むことはない」と言われたので、「ハンセン病じゃないか」と言われてから半年間ずつと学校に行き、修学旅行にも行きました。病気が分かったのは学校の保健室で、校医さんから「肩が薄いから保健所に行け」と言われた時です。実は、母もハンセン病で不自由だったんですが、何も世間に言わずに普通の付き合いをしとつたんですよ。母も同じ病気で「一緒に行きなさい」と言われ、保健所に行ったんです。それで「ハンセン病だから長島愛生園に行つたらどうか」と言われました。ここに来たらすぐに治ると思つていましたね。校医さんが連絡して市役所の方から何日に来てくれ、という連絡が来ました。僕らがお召し列車に乗る時も、本当に矛盾だと思つて「学校行つとれ、普段どおりの付き合ひをしておけ」と言いながら、いざお召し

列車の時になると、姫路の駅の自分たちが待つていた所からホームの歩いた所を全部消毒するんです。自分たちが家を出た後は、家の消毒だけでなく、親戚の家まで消毒したそうです。まあ、自分とこの家を消毒されるのはしょうがないとしても、何で親戚までせないかんかということ、一番引つ掛かるところです。

お召し列車は一貨車借り切りで、他の乗客が乗つて来ようとしたら「ここは駄目だ」と言つて止めよつたからね。僕ら、この病気が恐ろしい病気だ、という事を愛生園に来るまで知りませんでした。だから「何でこんなに空いているのに乗せんのかな」と思つたりしておつたですね。岡山駅に着いたら今度は愛生園の車が迎えに来ておつて、後から観音開きで人が乗るような、両脇がベンチになっている車に乗せられました。岡山駅から愛生園までは舗装されていないでこぼ道で、『恋愛道路』といわれていました。掘れて、掘れて（惚れて、惚れて）ということですよ。このときは私たち母子を含めて、13人が一緒に来ました。今残つているのは僕一人です。昭和24年に入所してすぐ、収容所（回春寮）に入るわけですが、「子どもが来たぞ」と言つて、少年舎の子ども連中が見に来よつたんですよ。どんなのが来たかと思つて。それで

僕が行った時に、後で愛生学園で同級生になった男ですけれどね、それが一番最初に見に来たんですよ。「僕はこの少年舎の子どもだ」というようなことを言うんですわ。それで「君は何歳や」と聞いてくるんです。お互いに話をしてる間に「ここに来て何年経つのか」と聞いたら「7年」と言うのです。「7年経っても帰られんのか？」と言うたら「帰れん」と言うたんです。その時にはその意味がよう分からなかったのです。それで気にも留めなかったのだけでも、その時「すぐに帰るつもりが7年経っても帰れん」と言うた事が、ちよつと引つ掛かったのですけども、明くる日になつたらそんなことは忘れていましたけれどもね。子どもはばかりの生活だったからそれに慣れてしまつてしまふでしょ。僕らが来た時期は食事がまずいとか、そんな事はなかつたしね。毎日野球をしたり、もう、遊ぶことに忙しかつたしね。その頃、子どもは80人くらい居ましたよ。僕は母と一緒に来たことで、他の人ほど寂しい思いをせずに済んだと思います。昔、僕が書いた作文に「僕は他の人よりもお母さんがおつたおかげで、寂しい思いとか、辛い思いをせずに済んだ」とか、書いていますわ。おふくろは不自由舎に入り、僕は少年舎に入ったので、別々の部屋でした。おふくろにしたら息子に面倒を見てもらいたかつたかもしれないけど、ここはそういう制度じゃないから。会う事は自由で、寝る時間以外は、その部屋の人に迷惑をかけんかつたら一日中おつてもいいんですよ。

少年舎に入つて中学3年までいて、卒業したら2年間、お礼奉公みたいにして、子どもたちに食べさせるために畑の仕事をして作物を作りました。だから3年半くらい少年舎におつたのかね。それで青年舎という所に行つてから、帰省する」ということを覚えて、それから外に出て行くようになった、生活が一変しましたわ。ここにじつとしていた生活が、外に出て行く。昔はね、らい予防法112には書いてあるんですよ。両親とか兄弟が危篤とか、その他特別な事情があるときのみ帰省を許可するという事になつてくるんですよ。それで皆ね、友だちが許可もろうて出て行くでしょ。そしたら、そいつに途中から電報を打つてもらうんです。「祖母危篤、すぐ帰れ」と。何回も親やおばあさんを殺していますよ。それで、ちよつとお金があると、友だちと東京とかに旅行も出来る。「姫路に帰る」と言つちやあ大阪や東京に行つて、5日や1週間で帰つて来て、「墓参りがゆつくりできました」とか、「おばあさんの看護もして来ました」と言つときゃいいんですよからね。プロミン113はよく効く薬のように宣伝されていますけど、そうばかりじゃありませんよ。僕らみたいに副作用で苦勞した人もおられます。あれは、体格とか年齢に合わせて液の量が違ふんですけど毎日打ちます。僕は10本くらい打つたらバツと病気が広がつてしまつてね、すぐに止めましたけど、それから何をやつても効き目がなくて、落ち着くまでに相当かかりました。若いということは体に活力があるでしょ、だから反応

が早いんでしょね。1年近く病院でベッド生活を送りまして。神経痛は痛いし、手は曲がつてくるし、顔は腫れるし……。だから、ある程度年齢がくるまでは菌がなくならなかったよ。僕ら夫婦は2人とも、菌がなくなるのが遅いほうでした。今は、手が不自由なのと、手足の知覚麻痺が残っています。知覚麻痺というのは、正座した時のしびれたままの状態が続いている感じですよ。冷たい物を触っておつても、熱い物を触っておつても、その熱さ冷たさが分からない。ミカン持ったら、「何か握っているな」ということは分かるけど、つるつるしているとか、ざらざらしているというとは分からない。目をつぶつて握つても、握ることは握れるけど感じがしない。これがリンゴなのかミカンなのか、大きさは分かるけどつるつるしているとか冷たいということは分かりませんわね。園のお風呂は温度管理されているけど、里帰りに行った時などは湯加減が分からないので、お湯をかぶる時に、先の人がかぶつていれば大丈夫だと思うけど、自分がかぶる時には、まず知覚のある体に当ててみるとかぶれない。旅先で火傷でもしたら大変ですからね。

国賠訴訟のことを色々読んだり聞いたりされたらね、そりゃ、強制収容が絶対悪いとか、**光田健輔**さんが悪の象徴とか、悪者の代表のように言われているでしょ。でも、強制収容によって助かった人がなんぼもおるんですよ。お寺の縁の下とか、橋の下やたもとで生活している人がいるでしょ。ここに

連れて来られたら、全部国が一応、面倒を見てくれる。昔やから今のように贅沢はないにしても……。ここでは皆同じ病気で、世間に気兼ねして生活せんでよい」と感謝している人が多いんですよ。それで、強制労働がどうかこうとか言うけれど、あの時代は日本が戦争で若い人が皆駆り出されて、労働力が日本になかったですから、療養所はましてやないですよ。昔は「この療養所に勤める」と言うたら、

「ああ、あの職員さんは身内に病気の人がおるから勤めていらんじやないか」という目で見られていた時代ですから、余計、勤める人は少ない。そうしたらどうしても不自由な人の面倒を軽症の患者が見ていられないかん。生活を立てていかないかんということになったら、昔はガスとか電気の時代じゃないですよ。薪を切ったりなんかするのは、止むを得ないと、思っんですわ、僕から見るとね。それで、断種が問題になっているけどね。断種をしなかったら、生活能力のない者が、どんどん、どんどん、子どもを作っていた場合、どないなるかといったら……。そういうことを考えていくと、表面立って言われるのと違う面があるでしょ。だから、**国賠訴訟**の原告になつていられる人はまず半分くらいでしょう。半分の人には「何をあんなことを言つて」と思っています。我々はこのに入れてもらつて、今のような生活をさせてもらつていっていることは、やっぱり**光田先生**に感謝しなくてはいけないと思っています。

長島猛虎会

長島愛生園

Y・Iさん

(66歳/T・Iさんの妻)

愛生園に高校ができたのは昭和30年のことです。邑久高校
新良田教室と言います。全国でひとつだけです。邑久高校の
分校みたいな学校で、高校に来るために全国(の療養所)か
ら転園してきた人が何人もおられました。定時制で1学年が
30人ですから全部で120人です。定時制といつても昼間な
ので、普通の高校と一緒にです。愛生学園(小学校)の場合は
先生も患者やったけど、高校の場合は健常者の邑久高校から
派遣されてきた先生でした。岡山県の教育委員会から派遣さ
れておるといふか。先生は重装備というのではなくて、白
衣の上に羽織るような格好です。ちょうど園外のお医者さん
のような。それで、職員室に入るときには消毒だけはせない
かんかった。「職員室はみだりに入るな」とかね、そういう
制限もありましたね。買い物してもらった時、お金は消毒液
の中に漬けて、ガラスに貼り付けて乾かすということをする
わけですね。昔は、家に手紙を出す時でも全部消毒しよった
んですよ。手紙は蒸し器かなんかじゃないですか? それは
定かじゃないですけどね。帰省する時に衣類も消毒していま
した。消毒すると匂うので、生活の知恵というのでしょうか、
洗濯して着て行けそうなやつを風呂敷か袋に入れておいて、
消毒した服を脱いで着替えるんです。そういうことをよくし

ていましたね。苦労と言えば苦労かな。

昨年は阪神タイガースの活躍で、長島も随分盛り上がりま
したよ。夫が長島猛虎会の会長をやっています。優勝祝勝会を
やった時には50人ほど来ましたけど、その中には職員が10人
いました。18年前に優勝した時には70人ぐらい集まったんで
すけど、入園者ばかりで、職員は一人も入っていませんで
した。18年も経ち、今は職員も一緒に飲んだり、食べたりし
ています。時代でしょうね。職員は女の人も、男の人も自由
に来ます。すごく盛り上がるんですよ。『六甲おろし』だけ
で3時間です。昭和60年には6万円かけて応援旗を作りました。
兵庫県出身者も比較的多いです。甲子園にもバスツアー
を組んで応援に行きました。ジェット風船の前に並べてね。
園内の阪神ファンの中には賑やかなのが嫌いな人もたくさん
居ます。寄付を募ったわけでもないのに、「祝勝会するから
参加する人は参加してください」と言ったら、参加せん人が
ね、「使ってくれ」と言つて、32、33万円も集まったんです。
多磨金生園にも、猛虎会があるんですよ。愛生園のシヨッピ
ングセンターでは優勝した時にはセールがあったし、阪神タ
イガースのカレンダーも扱っていました。阪神タイガースの
活躍に私たちは元気を貰いました。

80年を生かされて

長島愛生園 谷川 秋 夫さん（79歳／男）

私は加西市の出身ですが、加西市は差別をなくすためにハンセン病のフォーラムを開いて下さったり、今の市長をはじめ人権推進課の皆さんが一生懸命になって、熱意を持って、啓発に力を入れて下さっています。ハンセン病に対する、特に高齢者の人たちの差別・偏見がまだまだ根強いので、それをなくそうと努力して下さって、私はとても感謝しているわけでございます。加西市は、昔は加西郡と言っておりましたが、私はそのある町の外れの貧しい農家の6人兄弟の4男として大正13年に生まれました。一言で言えば極貧といえますか、とても貧しかったです、小学校に上がってからは割合大きな家に移り住んで、楽しい少年時代を過ごしました。ちようど小学6年生になった時に、父が「これからの人間は中等学校だけは出ておかなくてはだめだ」ということで、受験勉強をすることになりましたね。普段は夕方灯が点る頃まで学校に残って勉強し、日曜日でも学校に行つて勉強していました。そしていよいよ受験。試験を受けたんです。それで1日おいて結果が出るので、すぐ上の兄と一緒に自転車をこいで見に行ったんですよ。ところが、私の「168」という番号がないんですよ。何回見てもないんですね。私の小学校から中学を受けたのは9人。みんな受かりました。私だけが

受かりませんでした。一緒に受けた、成績のあまり良くない友人も受かりました。なぜだろう……。これは後になって思った事ですが、結局、答案はスラスラ書けたんですけど、身体検査の時に検査官に「これはどうしたんだ？」と、私の背中の一部にちようど百円玉くらいの赤い斑紋（あざ）が出てたんですね。そんなこと分かりませんかね。「ここに赤い斑紋があるんだけど、どうや？ 感じはあるか？」って何かで突っ付きましたよ。「いや、感じはないです」「そうか」で、後から推測できたのは、その事が原因で不合格になったんだということ。それ以外に私が滑ったという原因は見当たらないですね。それから幾日か臉を真っ赤にして泣いていました。やっと気を取り直し「1年遅れてもいいわ」と高等科（高等小学校）に行きましたよ。「遅れてもまた受験して中学に行けばいい」と。ところがその春頃から、顔が腫れてきたり、眉が薄くなってきたり、この病氣の特にL型（びり）の特徴である症状が現れてきて。昭和11年の春ですから、12歳ですね。それから肘とか足の腿とか、その裏も感じがないところがちよつと。しばらく学校に行つてたんですが、段々顔が紫色になってきたし、高等2年をちよつと行つただけで、学校を辞めてしまいました。受験どころじゃなかったですね。

それから色々灸をすえてもろたり、お稲荷さんに拜んでもろたりしたんですけど、町医者に診せたら神経痛やタムシやと言うだけ。また、高価な漢方薬も飲んだり、雑誌の広告を見て東京から薬を取り寄せたりしたけど効きませんし、薬には随分お金を使いました。母は一生懸命お百度参りや、神仏を拜んだり。それでも良くなりません。それで、ちょうど一番上の兄が帰ってきて「顔が普通じゃないけんな、とにかくグズグズしよつたらあかん。それは大きな病院で診てもらって、病名をはっきりさせることが先決じゃ。明日にでも姫路の日赤に行つて、それから考えたらいいじゃないか」ということで、昭和13年3月初旬に日赤に行きました。だけど日赤では「ここでは分からないから県立へ行つてくれ」と。それで今の神大附属病院かな…当時は県立病院だったんですよ、そこに行きました。それまで色々な書物を見て「らい病でなかったらいがなあ」と思ったこともあり、一縷の望みを持つて行つたわけです。皮膚科での診察では「お父さんはちょっと残つてほしい」と医師に言われ、私だけが外で待つていると、間もなく父が出てきましたが、暗い顔をしていて一言も言わんですよね。それで私の病気は『らい』だと直感し、床もろともに奈落の底に突き落とされたような感じがしました。

私が県立病院から家に帰つてから数日後、警察の方から巡査が来ました。巡査が私服で着てね、母親と話をしているのを聞きましたら、「岡山の愛生園という大きな病院に行くの

が一番いいんだけど、今満員でな、ちよつと入れないんや。それで欠員があつたら知らせるから、それまでお子さんは、あまり外に出ないでほしいんや。そのかわり、この薬をあげるから、毎日2つずつ飲んで、その日まで待つてほしい」ということでした。

この病気は伝染すると医師から聞いたので、家族に迷惑をかけないため、自分から進んで母屋に続く土蔵で暮らすようになりました。土蔵は3畳の間で3度の食事は母が運んでくれましたが、その膳には家の者が普段食べないような魚や果物、おいしい肉の缶詰などがのつており、母親の愛情というもの、身に染みて感じました。そんな日が過ぎて、体も段々と外見に目がいくようになりますし、蔵の中の生活は佻しく、トイレは、昼間は土蔵の近くに一升瓶を置いて、そこで小便をし、大便なんかは夕方になって薄暗くなつてから便所に行く。そんな事がずっと続きました。

ところがある日、すぐ上の兄が「こんな事じゃ、わしに嫁の来手がない。いつそのこと満州へでも行つてしまいたい」と言つて居るのが聞きました。私は、「家族に病気をうつさなければここに居てもいいと思つていたけれど、私がここに居るといふのは、そんな甘いもんじゃねえ。これは家を駄目にしてしまう。兄弟たちの結婚も駄目にしてしまう。自分は早うここを出なきゃいかん」そう思いました。兄の話を聞くと、私は家族に迷惑をかけたため、この家を出るのが一番

だと考え、父に頼んで愛生園に入りたい旨の手紙を出しても
らいました。父は前々から考えていたようです。愛生園から
は折り返し返事が来しました。それには「ご子息の入園を待っ
ています。用意して来て下さい」と書いてあったのです。

昭和13年の7月6日に愛生園に入園しました。園内には
『愛生学園』という小学校があり、尋常科（尋常小学校）と
高等科をあわせて生徒数は70人を超すこともありました。尋
常科の上級生や高等科の生徒、それに卒業生を含めて15歳ま
では、裏山の畑を開いて野菜を作り、その半分以上は中央炊
事場に納めていました。私は案外百姓嫌いだね、小学校時代
そろばんが得意だったもんですから、事務の方が好きで。そ
の後、事務の方の仕事に移りました。そこで働いている人の
中に、短歌を作ってる人が3人ほどおりました。それで「ど
うや、短歌を作ってみんか？」ってことで、短歌を始めたん
です。ちょうど明石海人が『白描』を出した頃なんです。
『我々は長くは生きれない。』虎は死して皮を残す、』人は死
して名を残す』、とにかく短歌でも作って、明石海人のよう
にはなれんでも、少しは名を残した方がいいんじゃないか」
それで私も「そうかな…」と思って、歌集を読んだり、短歌
を作ったりしました。それを園の機関誌『愛生』に出しまし
たら、3首載る時もあるし、5首の時もありました。14年の
『愛生』には、私の歌が出ていますよ。

その後、17年頃ですが、突然に帰省許可がおりまして、連

絡もせずに家に帰ったんです。玄関ですぐ上の兄が「どなた
さんですか？」と言うので、「わしや、病気が治ったんじや」
と言うと、すぐに父母を呼んで、大変喜んでくれました。明
くる日、鶏を潰してすき焼きをしてくれました。本当に感慨
無量のひと時でした。父とも何年振りかで枕を並べて寝まし
た。父の体調が悪く、妹は小さくて、皆忙しいですから、家
は汚れているんですよ。それで私は、毎日湯を沸かして、家
の柱から皆拭きましたわ。せめてもの親孝行のしるしと思っ
て。それから尼崎の製鉄会社に住み込みで就職したのですが、
なんの治療もしていなかったから、3ヵ月ほどで赤い斑紋が
出てきました。「これはいかん！残念だけど療養所に行か
ならん。愛生園はなかなか帰らしてくれないから、今度は東
京の全生園に行こう」そう思って全生園に入所しました。

全生園に入り、キリスト教の信者となり、昭和18年のクリ
スマスに洗礼も受けて、とても清々しい気持ちになったん
ですが、次第に戦争が激しくなりました。防空壕掘りとか、退
避訓練を盛んにやるようになりました。食料もますます貧し
くなり、「こんなんじやいかん。家に帰ったら米の飯がたら
ふく食えるんだがな。家に1度帰って、銀飯をたらふく食
べ、どうせ死ぬのやったら家に近い方がいいから、もう1度
愛生園へ行こう」と思い、それで全生園の柵の垣根を越えて
出ました。今度は病気も悪くなりました。家に帰ると、
一番上の兄が出てきました。「なんだお前顔が腫れとるじや

ないか。もう帰ってくるな。困るぞ」と言われました。それで兄は母親に向かつて「おかあ、冷や飯でも食わして、はよ帰しな。畳の上へ上げたらあかんぞ」と言いました。兄はそのままどこかに行つて帰つてきませんでした。母親は涙をポロポロこぼしながらね、「お父つつあんがのう、とうとう死んでしても、昨日法事が済んだばかりなんじゃ」と言うんですよ。私は仏前に行つて、新しい位牌を抱いて「心配ばかりかけて申し訳なかつたな」と言つて泣き崩れたんです。その晩、私は一番上の兄を恨みました。でもよう考えてみれば、兄だつてこのハンセン病については、国が怖い病気だと周囲に宣伝しているし、私が病氣ということ、家族は世間から冷たい目で見られていたと思います。それで兄の言うことも分からないわけでもないんです。

家に帰つて銀飯をたらふく食べて1週間ほどゆつくり…と思つていたのですが、その願ひとは反対に、その晩は、畳の上には上がらなくて、納屋の土間に涼み台を置き、その上に布団を敷いて休み、翌朝早く家を出ました。出る時に母は、早く起きてたんでしよう。大きな握り飯を10個ほど作り、傷まないように梅干を入れて、こんがり焼いてくれました。それを風呂敷に包んで持たしてくれました。それが母との永遠の別れとなつてしまつたのです。

私の願ひのひとつは、先祖の墓参りをしたいことでしたが、先だつて多くの方の協力により、肉親を納得させ、この願ひ

を実現することができたのです。その日は、春の陽がうららかに射していて、暖かく、我が家の墓は大きく、白ユリなどの花を墓に捧げてきましたが、涙が後から後から出てきました。台石に上がつて墓碑の3つを順に麻痺の手で探りました。そして墓に向かい「父よ、母よ、兄よ」と私は泣きながら呼びかけたことです。私にとつては68年ぶりの墓参りであり、この時の感動は今も胸に残つております。もうひとつの願ひは、竹馬の友と語り合いたいことですが、近い将来には必ず実現することでしょう。

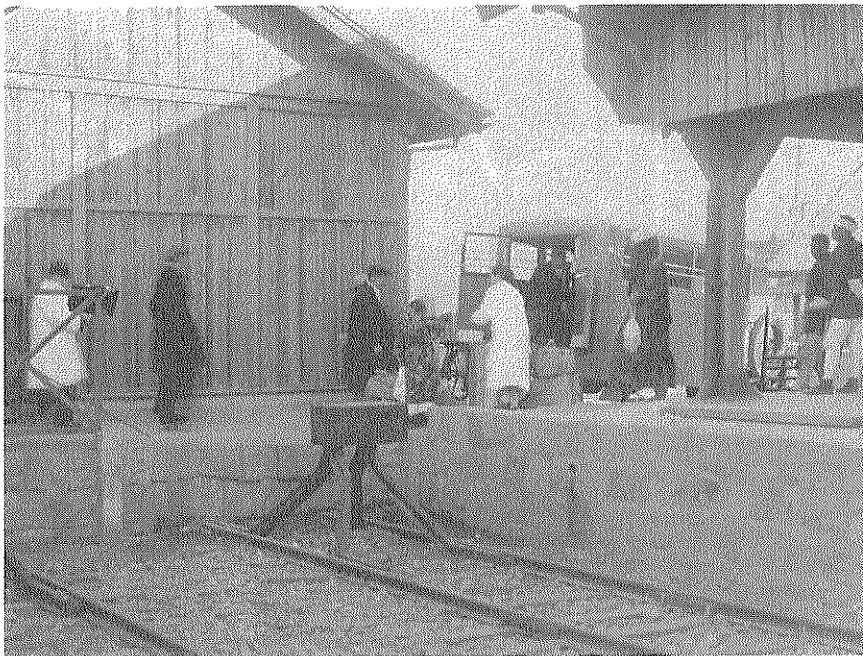
最後のお願ひは、ハンセン病を正しく理解して頂きたいことです。私は、今ではハンセン病も治つたものの、目も手も足も不自由という重度の後遺症を持っています。90年間のらい予防法が廃止され、3年前には違憲国家賠償請求訴訟に勝利し、療養所も随分明るくなりました。しかし、いまだハンセン病に対する差別・偏見が、特に高齢者層に根強く残つており、私たち回復者と家族は悲しい思いをしています。それを払拭するためにも、まず療養所を訪ねてほしい。正しくハンセン病を理解し、私たち回復者を故郷に「お帰りなさい」と言つて迎えてほしい。もう20年もすれば、ハンセン病療養所は、また、私どもは地上から姿を消すでしょう。明日にでも会つて、肩を叩き合いつつ語り合つたり、歌を歌い合つたりしようではありませんか。

観音開きの車

長島愛生園

T・Hさん(67歳/女)

小学4年生の末から5年生の始めには顔が腫れ、眉が抜けるという症状が始めていました。その後、熱がたまつてふくれる水ぶくれもでき、その痕があちこちにできました。眉毛の抜けた当時はまだ「おかしいな」と言うところだけやっただけど、私は早よう※19に結節み※19たいなのができたのよね。それで町医者に行つて、あの時期には何も言わずに治療だけしてくれましたけど、あんまり結節が出てくるので市民病院に行きました。そうしたら一発で分かつてしまいました。そこから保健所に連絡したんでしょう。それで帰つて「そんなはずはない」ゆう事で県立病院に行きましたら、そこでも同じ診断でした。市民病院で「こういう所があるから行きませんか？ 学校があるし、子どもさんたちもたくさんいますし、勉強も出来ますから行きませんか？」つて言われて。私も普通やつたら行きたくないところやけど、顔に出ていて恥ずかしいのが先に立つてるからね。何ヵ月も学校を無断欠席していました。もう、恐ろしくなつて嫌になつて学校辞めてしまひ、家でずっと寝ていました。診察を受けて長島愛生園に行くまでは半年ぐらいたったかな、1年もいなかったような気がします。愛生園に行く時は保健所から迎えに来られて、皆がおるのに家の中じゆう消毒されました。昼間のことだった



入所者を駅まで迎えに来た、愛生園所有の観音開きの車(長島愛生園自治会提供)

ので、近所の人が出て来て「Tちゃん、やっぱり悪い病気やつたんやな」と、あちこちから聞こえてきて、それが一番恥ずかしかつた。それと、怖いのと、恐ろしさ。初めて恐ろしさをそこで感じました。家を出てから私の通る所をずーっと消毒して、岡山駅で降りた時も消毒されました。お召し列車には、県の担当官が乗ってきましたが、列車の中では一言も言いませんよ。慰めの言葉のひとつもなければ、励ましの言葉のひとつもない。あの当時は新幹線はまだできてなかったから、岡山駅でもものすごく人が待っていたのよ。その前に降りて、「皆さんしばらく待ってください。この貨車は伝染病の人が乗っていたんで、これから消毒しますから、皆さんも少し乗るのを待ってください」という放送があったんです。恥ずかしくて下を向いて歩いていました。横から出て、それで観音開きの車に乗せられました。あれは怖かったね。不安だった。確か、島に行くのに段々と山に行くのよ。ガタガタ道の、今みたいに道は良くなかったでしょ。ガタガタ道の山奥、山を越えたら海やった、いうようなところで、隔離されるということも知らずに連れて来られました。

私が愛生園に来たのは昭和26年で、30年に母が来ました。母はちよつと斑紋（*16）が出ただけでしたけど、私に来る時に消毒されたり、えらい目におうたりしたのを知っているから、こそつと姉が「お母さんが、顔に赤いものが出来ておかしいから」と言ってきました。母が入所することになった時、私を

可愛がってくれていた人が「迎えに行く車に乗って行つてはどうか」と言ってくれたけど、その時には行きたくない、園の外にはまだ出たくないというほど怖かった。自分の病気が怖かったし、観音開きの車が怖かった。母は4年間ここで生活して、ようになって帰りました。母が家に帰ってからは、県の担当官が家によく来たそうです。逃走みたいな形やから、園から連絡があったのかな。時代が時代でしたから。姉から「家にしよつちゅう来て困る」という連絡がありました。来たらやっぱりちよつと包んで渡していたらしいよ。それで県の担当官が愛生園に来た時に、夫が「絶対にあそこの家に行つてもらつたら困る」と言つて怒り飛ばしたら、行かんようになつたらしいけどね。

私が結婚したのは33年でしたが、結婚した者同士ひと部屋に2組が入りました。昔は8組くらい入ったこともあったよです。部屋の間仕切りはカーテンかなんかですよ。私らは板を貼りましたけどね。あの時代は人権ゆづのを考えるより、生きていくのが精一杯で、28年のらい予防法の時は多少人権を考えたと思います。それが徐々によくなつて、やつとここまで来たという感じやね。国家賠償請求訴訟（*17）が起されたことを知った時は、勇気が出ました。原告に入つたらもつと勇気が湧いてきました。

病気の軽い人は恐らく2、3年したら帰れると思つていたでしょうが、私は行くと決めた時には、もう家には2度と帰

れない」と思っていました。この病気の者は周囲が消毒されたのを見て、寂しいなあ」と思ったけど、家に帰りたいなあ」とは思わなかった。そのうちに、県の里帰りが始まって、ああ、1回外に出てみたいなあ」という気持ちが出て来て、今は外出するようになりました。私が原告になった時に若い弁護士さんと親しくなりました。それから温泉に連れて行ってもらいました。温泉に入る時には「私こんなに結節の痕があるから温泉なんかよう入りませんわ」と言ったら、「何が、それがどうしたんや」と言われ、それで一緒に入って来ました。「また行こうな、Tちゃん」と言ってくれて、今度は故郷に行って来ました。一晩泊りだったので、私の生まれた所から、学校、墓参りとゆっくり行ってきました。でも最近、温泉ホテルで宿泊拒否の事件があったでしょ。ハンセン病に対する偏見や差別がなくならないと、外出しても気になるし。1日も早く偏見・差別のない社会になってほしい。私たちも言うだけでなく、頑張りたいと思います。

「もうこの病気は何ともなくなつたんやから、帰ってきたら？」と姉が時々電話で言うてくれます。「今はひとりですんでいるから。ひとりだけやから何の心配もないんやから、たまには来たら？」と言われるけど、私は嫌や。私の方からは行くつもりはありません。行くぐらいやったら、他の所へ旅行するほうがよっぽどいいと思うわ。



患者用棧橋のすぐ近くに建つ「回春寮(収容所)」。入所者はまず、最初の約1週間をここで

気象観測の仕事に従事

長島愛生園

M・Mさん(76歳/男)

僕が長島愛生園に入ったのは20歳の時、昭和23年の4月。

兵庫県から10人一緒に来た。僕の場合は、最初、保健所から手紙が来たわけや。「保健所へ出て来い」言うてな。それで23年3月中頃やったかな。それで診察を受けて、「まあ、君らまだ若いし、早く療養所に行った方がいい」と。それで「いや」とは言われへんもん。そこで愛生園の話色々するわけや。「こういうとこや、きれいなとこや。」言うて看護婦が。「Mさん、そりやあ愛生園へ行った方がいい」とか言うて。なんかこんなパンフレットをくれたわ。風光明媚な島でなんとかか。って書いてあるんだよ。こつちも結局、病気で顔がちよつと腫れとつたし、家にも居れなくなつたからな、「そりやあ行った方がいい」と思つて来たけどな。だから診察してから入園まで1カ月もないわな。

入園する日は姫路まで出て、姫路の駅で長いこと待たされてな。神戸の方から衛生課の担当官と一緒に5人乗つて来たんです。それで汽車を待つてる間に嫌な事があったん。消毒された。駅員がな、大きな消毒器をせつせと肩に背負つて。但馬の方から来た3人と僕ともう1人で、ホームに座つてたら、消毒器でダーツと消毒するんだよ。駅員がだよ。ホームにお客さんがようけおるわな。お客さんは「何ごとか」と取

り巻いて見とるんだ。その時は、恥ずかしいやら嫌な感じでしたわ。

園へ来てからは、若い者ばかり18〜25歳までが揃つてる青年舎に入らないかん。それで皆は「作業に就かないかん」言うてしとつたけど、僕は足に傷があつてな、毎日外科に通わないかんし。園も仕事は無理にさせなんだわな。それから足がちよつと良くなつて、ちよつと仕事もしたけどな。青年舎に昭和27年までおつてね。それから1年ほど十坪住宅に目の不自由な人の付き添いで入つて。28年〜59年までの30年間は、園内の長島観測所に住み込んで仕事をしとつた。



当時、入所を促すために配られていた、愛生園のパンフレット(長島愛生園「歴史館」所蔵)

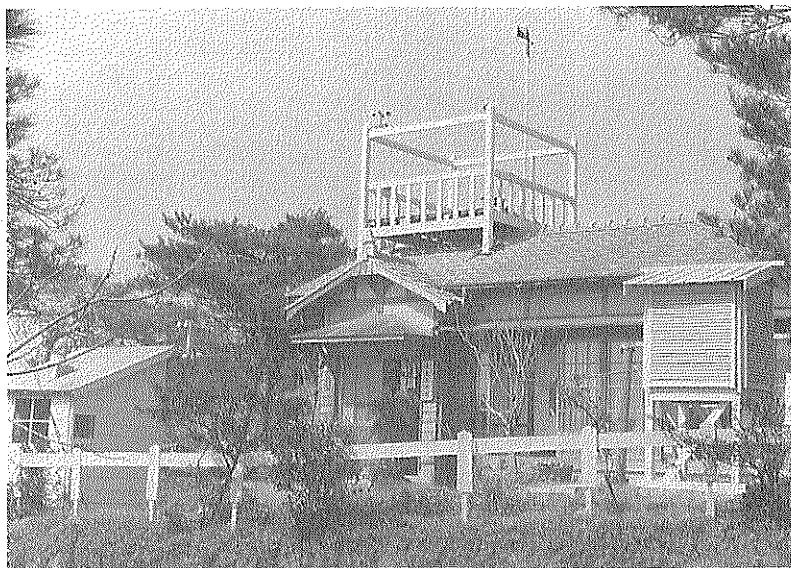
その時分は観測所で働く職員も5人ぐらいおったわ。僕は観測所に住み込んでたから、朝6時と夜9時と夜10時の観測を一人でやっとな。通いの人は昼間だから、朝9時と正午と午後3時の仕事をして。それで朝6時いうたら冬なんか暗いかな。それに夜の6時と9時；全部僕がやらなあかんから、どっこも遊びに行けんわな。今でもやってるよ。今は簡単なもんで、気温と雨量を測ったり、気温は最高と最低を測って、あとは気象現象や。どっかに行つとつてもすぐ「仕事があるから；」って帰らなあかん。「そんな仕事なんか放つておけ」って言うけど、そういうわけにはいかん。毎日やるのはそりゃあ大変じゃわ、もう50年もやっとな。たまには代わりを頼むけどね。帰省するときはな、代わりをやってもらわにや。昭和52年にアメダスが出るまでは、観測したデータは岡山気象台に送りよつた。向こうから書類が入つた封書が届いて、それに書いて送るわけよ、郵便で。データを送るのは10日に1回ぐらいかな。気圧計もあつてな、測候所並みの仕事をしとつたんじゃ。だからここは信頼されとつたんやで。「真面目にやっとな」いうてな。ここを区内観測所としてな、やっとなんだよ。大阪管区気象台から表彰も何回もしてまろうとる。

51年の第2室戸台風いうてな、17号台風。あの大雨の時はすごかつた。あつちこつちで道が寸断されて、外から応援は来てくれへん。自衛隊が来てくれるいうとつたんが、「船が

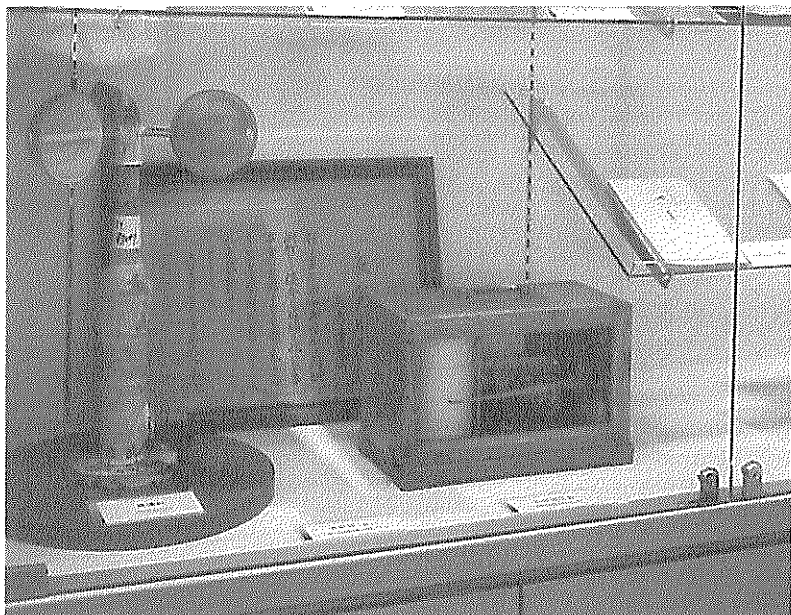
着けられん」言うて中止になつて、大事やつた。まだ邑久長島大橋がなかつた頃で。ちよとど和歌山の紀伊水道から暖かい風が入つてきて、ちよとど小豆島から長島・和気と、ものすごい、一番雨がよう降つたんや。1日500ミリいうたらすごい。岡山気象台もびつくりして「こんなこと初めてや」言うて。岡山県で記録作つた。まあそんなこともあつてな。

そんなことで、入園して今年で56年になる。社会復帰については；もうそんな気はないな。いや、入つた当時もそんな気はなかつた。出ても足が悪いやろ？ 昭和30年代の頃はようけ社会復帰で出てたよ。希望したらな、検査をしてどうもなかつたら「出て行つていい」と。手の悪い者も出つた。でも、歳とつたらいつまでも外では無理やろ。だから外に何十年かおつて、また帰つてくる；そういう人もおる。中には歳いつても「帰らん」言うて頑張つてる人もおるけどな。僕の場合は、こつちの足は指が全然ないからな、踏ん張りがきかんしな。走ることもできんわ、突つ張りがきかんから。足が良かったら、出つたかもわからんな。

昭和9年の室戸台風から昭和54年までの間、岡山測候所区内観測所として気象状況を提供していた「長島気象観測所」。(長島愛生園自治会提供)



長年、園内での気象観測に用いられてきた風速計や自記気圧計などが、園内の「歴史館」に展示されている。(長島愛生園「歴史館」所蔵)



ささやかな幸せにも感謝

邑久光明園 池田 一雄 さん（69歳/男）

私の親父は、私が7つの時に死んでいますねん。うちの親父もハンセン病やったんじゃないかと…。姉は隠してるけどね、私は確実にそう思ってる。私の姉もこの病気になって、私より先に、昭和16年くらいに光明園に入ってるんです。私が6つか7つの時に、面会に1回来てんねん。姉に会いに、親に連れられてね。その姉がおるから、私（入所したら）2度と帰られへんということが、子どもながらに分かってたんや。

私が光明園に入所したのは昭和23年の8月、13歳の時でした。自覚症状は10歳の後半ぐらいから…、変やったんやと思わ。あの頃、戦時中で、子どもでも敬礼を訓練されてたんやわ。人に出会ったり、学校が始まる前に敬礼したりしてね。それである日、私だけ小指が曲がってるねん。そしたら「おまえはマッサージの訓練を怠けてるんとかうか」ということになってね。当時は学校に暖房なんかもないからね、校庭で手を揉んだり、ラジオ体操してたんですよ。そう言われて意識してやるねんけど、ちっとも小指だけは伸びひんでね。それで帰って、家の者にこの話をしよったら、家の者は分かるわね。前に姉があるんやから。「またか…」ってな感じや。

それから3年間は家におったよ。12歳の頃に市役所の人が2回ほど「はよ入れてあげて、はよ帰れるようにしてあげたらどうや」言うて来ましたよ。それでうちの母親は「この子は末っ子やし、田畑やっつても絶対に病院（療養所）にやりません。一生食べて暮らせるようにしますよ。人に迷惑のかかるような事はしません」言うて、何回来ても突っ返してたわ。それでどうとう昭和23年の春にまた来た時に、私にもその話聞えてくるしね。母親が、私が聞いているのが分かったから「どうする？」って聞くし、「うん、行くよ」って言うたんです。それでうちの母親がワツと泣いてね。「この子にどうやって説得しよう。どないして分からせよう」と家族中が思ってたに違いないからね。そやけど私は2つ返事で「行く」言うて。その年の8月に入りました。

母親はよく面会に来ましたよ。ここに姉もおるし、年に1回か2回、多い時は3回。戦時中でも、ここに姉がおるから来ていたぐらいで。その当時、あれだけ面会に来てた家族もあまりないんやないかな。入所してからは、60、70人ほど児童がいた『双葉』という少年舎に入って。園の小学校にも行っただけ…。私、20年から3年間ほど学校行つてないやろ。学校行くの嫌になって、辞めたから。ここの小学校にも半年は

ど行っただけだね。先生が病院におられてね、当時私は無口やったから、よう自分でもの言わんから、手紙を書いて人に渡してもらってね。「学校行かない。自分一人で勉強するから」言うてね。先生が説得に来たけれども、うんともすんとも言わんと黙って。私だけなんや、学校辞めておったんわ。その代わり、本という本は、それから14、15年間は読みに読んだね。最初は漢字もなんも分からんから、平仮名が打つてある本を読んでは、ノートに漢字を書いて覚えていくわけ。童話を端から端まで読んで『巖窟王』、『風と共に去りぬ』、一番長いのが『大菩薩峠』ね。これはもう半年かかって読んだ。よう読んだね、ほんまに。自分で言うのもなんやけど、「本を読んだ」というのはな、ひとつのプラスやと思おうとる。

17、18歳で上（青年舎）に上がってからも、盆踊りやいうたら音頭取つたり。足が悪いからよう踊らへんからね。楽団から「歌わんか？」言われたら歌つたり。今はカラオケがあるけど、昔はいつも鼻歌うたつた。それがなかったら、あないに朗らかにしてない。うちの家族は全部そういうのが好きでね。こんな病気が出たからって、泣きごと言うてるのは嫌いやから、家族も朗らか一本やったね。私は9人兄弟の末っ子。兄弟も皆結婚してるけど、うちの家族は「こういう弟がおる」って言うて、皆一緒になつてるねん。だから相手にも全部会って、泊らせてもろたりしてる。とにかく、あとでばれるつちゅうのは嫌やからね。



邑久光明園の旧小学校。今も当時の校舎が残されている

その後、今から25年ほど前に、こんな手が悪いのに運転免許を取ってね。岡山では、教習所を3ヵ所あたって、3ヵ所とも断られてね。「満員や」言われてね。空いとしても「満員や」言うて。それで「いつ空くか知らせてくれませんか？」言うても返事がない。そしたらここで、恩給取りの人が、恩給新聞に西日本身体障害者自動車教習所って書いてあったのを持って来てくれてね。大分県まで私行ったんや。50万円持ってね。その頃の50万円って大きいんか。全財産持ってね。

それで先生に会って「実は何十回と教習所に皆断られて。できたら車に乗れるようになりたいんやけど、私どものような体でも車に乗れるようになりますか？」って聞いて、テストだけしてもらって。あの頃、ノークラがまだ一般にあまり出ない頃だったけど、そこにはノークラの車がようさん置いてあるねん。それで「いっぺんやってみるか？」っていうこととで。その先生も障害者でね。片足義足の先生もおってね。生徒も皆障害者やから歩けん人が多いねん。車椅子に乗ってね。この病気みたいに、手だけ悪いのは一人もおらんかった。免許取るのは、学科でいっぺん滑って、ちょうど50日かかった。私途中でいっぺん逃げて帰ろうかと思ったんや、20日目頃に。「こんなもんやっても将来車に乗るとは思われへんのに」と思って。そしたら先生は見破ったよ。「免許取ったらあんたの人生変わるで」って言うてくれはって。その先生がようやくってくれてね。「自宅に温泉を引いてるから、お風呂

に入り来い」言うて迎えに来てくれてね。休みの日は、九州見物をしたくて「先生、観光バス出ますか？」って言うたら、先生が「そりゃあ、私に任せてくれ」言うてね。「ガソリン代と飯出してくれたら、私が案内したる」言うてね。その先生休みの度に、よう連れて行ってってくれてん。遠い所やったら朝早くからね。ようしてくれて、忘れられへんね。

最初の車は24万キロ以上乗ったからね。今は2台目。私、ここに来た時から不自由な体やのに、この手で車乗るとは……皆不思議やと思う。車の免許証取ってから人生は変わったね。いつも誰かに頼んで連れて行ってもらうのが、自分で乗せて行ったり、母親迎えに行ったり。長崎まで車に2人乗せて行ってきたしね。青森までも行ってきた。

園では朗らかに過ごさせてもらってる方やと思うよ。私、ここでは友だちが多い方だね。私ほど連れの多い人も少ないんやないかと思うくらい。ともかく、仲良く文句言わんと朗らかに生きたい。昨日もめた人にも、明るる日にはなるべくこっちから「こんにちは」って言うていこうかな……という考えで通してきたら、これが普通になつてしもてな。友だちと喧嘩した後はな、まず勝ち負け考えずに挨拶ぐらいできるよとでないと。一息まずい生活送るのは嫌やからな。「おはようさん」って声掛けたら、今度会った時に「どないしたんや」って言えるからな。

私は昭和23年に入所して、それからの自分の考え方やけど、



邑久光明園から望む、夕暮れ時の瀬戸内の海

ここに来なかったら家では暮らせてないし、家の者は困る、近所には嫌われる…、だから「強制収容」に関して文句を言う気にはならへん。家においても、どこにも居場所はなかったと思うよ。「幸せ」ってどれで決めるか分からんけれど。この病気であって、この体であって、なおかつ3度のご飯を美味しく頂いて、見たい物も見れるという。その「幸せ」しか私は知らんから。それで有難いと思う。姪たちがしょっちゅう電話かけてきてくれるしね。姪3人おってね、「来い」言うたらいつでも来るよ。また同じようにカラオケが皆好きだね。姪たちの婿さんも知ってるからね、ここに来とるしね。だから、お陰さんで、そうやって喜びの言葉を言うて終われるのは、一番有難いんじゃないかな…と、自分ではそう思うております。

最後にひと言、言わせてもらうならば、自分の一番の自慢は、私のような子どもを生んだことで、人一倍苦労しただろうに、87歳で亡くなる年まで、私に一度も嫌な事を言わなかった母親です。私はこの歳まで、不自由な体で生涯を過ごして来ましたが、いい家族、いい友だちに恵まれてきたので、後悔はありません。私を生んでくれた母親に「ありがとう」と言いたいです。

治療薬の様々な思い出

邑久光明園 岩本元寿さん（81歳／男）

私が療養所（邑久光明園）に入ったのは、昭和17年の7月17日。20歳の時でしたね。私を送るため兵庫駅まで一緒に来た父親は、汽車を待つ間に悲しくなったらしく、居たたまれなくなつて、「おまえひとりで行け。わしは園まで行かん」と言い出して、帰っていききました。乗つて来た自転車を押す、寂しそうな後姿を今でも覚えています。

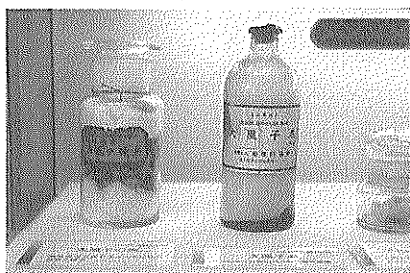
その当時私は、神戸の錬鉄会社で働いとつたんです。大きな鉄を焼いてクランクを作つたり、色々なその他の機械を作つたりするんです。その職場で私は初めて、この病気の症状を自覚することになったわけです。私はムトンという機械を運転しとつたんですわ。クレーンで運ばれてきた真つ赤に焼けた鉄を、私がムトンでドンドンドンと打ちつける。それをブレーキで「ガッ！」と押さえるわけですけど、そのブレーキがものすごく熱いんですわ。そこである日スポンは焼けずに、火傷をしとつたことに気付いて：。「スポンが焦けても焼けてもないのに、何故足がこんなんに火傷して、足が水ぶくれになるんか」と思いました。それで仕方なしに市立病院に行つて「自分は火傷した覚えがないのに、こないになるといふのは、これは何かの病気ですか？」と聞いたわけです。そしてらそのお医者さんは「その事は私も詳しく知りません。とに

かく手紙を書いてあげるから、その手紙を大阪の大病院に持つて行って、そこで診察してもらつて下さい」と言うて、手紙を書いてくれたんです。

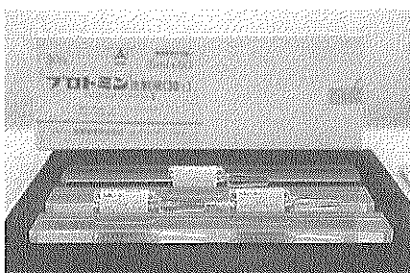
そして手紙を持つて阪大病院に行つて、大病院の裏側にある「皮膚科別館」という所に行きました。診察後、その医師に「これはレブラという病気で、あんたぐらいの病状なら2〜3ヵ月くらい療養所に入つて治療すれば治りますよ。どうしますか？」つて聞かれて、2〜3ヵ月で治るんならね：「それなら私、療養所へ行かせてもらいます」と言うたんです。それでお医者さんが「こつちから手続きをしますから：」といふことで、その日は家に帰りました。それから県の方に連絡が入り、私の方に県の職員が来られて、「昭和17年7月17日に兵庫駅に来て下さい」と。入所してみたら、「2〜3ヵ月で治る」といふのは嘘でしたね。医者も嘘をついているわけです。治療といふのはね、あの頃特効薬といわれる薬がないから、大風子油とカルシウムを注射する：それだけですよね。それは一時的に進行を抑えるという程度のもので。それで薬はあらへんし、看護婦さんもほとんどいないしね。療養所やなしに収容所みたいな感じで「これはえらい所に来たなあ」と思いました。

当初の治療薬だった大風子油は、筋肉注射やから痛い、痛い。それで太腿に打ってもらったのが、ばい菌が入ったんやね、腐ってね。ひどいめにおうたんですよ。大風子油は油やからね、もうドロドロの膿が出てきたんですわ。腐ってしもてね。それをメスで切って……。あの当時は痛み止めの注射がないでしょ？ 痛み止めもなしに、傷口を開けといて、膿掻きみたいなやつでガーガー掻き出すんですよ。もう本当に火箸を押し込まれたような痛さですわね。それはもうすごかったです。そんなんで大風子油の注射で、えらい目におうた人も当時は大勢いましたね。

そしてその後、昭和20年代の中頃にプロミンプロミンができたんですが、その頃にね、原田先生が私に「ドイツから新薬が来るんで、その係をしてくれ」言うてね。その薬を使う人たち



プロミン以前の治療薬、大風子油（長島愛生園「歴史館」所蔵）

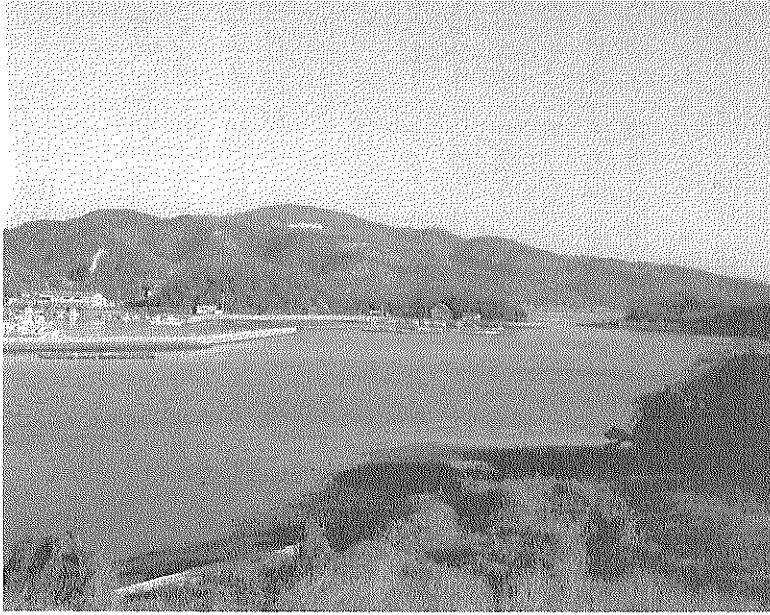


劇的な効果が当時注目されたプロミン（長島愛生園「歴史館」所蔵）

のチェックなんかをするわけですが、それで私もその薬を使っていたので、私は出始めの頃はプロミンをやらなかったわけです。その新薬が合わなかったからでしょうか、まあものすごい神経痛が起ったんです。七転八倒の苦しみやったですね。昭和29年の1月、10月頃まで、ひどい顔面神経痛がきて、体中全部の神経痛が起って、それまで異常のなかった目が、目の玉も痩せて10月中旬までに両眼失明してしまいました。薬がきついんですね。それに色々な薬もやってもんやから。

帰省ですか？ 私が結婚する時と、父親が危篤きくの時に一時帰省しました。なつかなか出してくれなかったですね。一度、入所した当初に逃走したことがあります。もう里心がついて帰りとうていしない時にね、まだ戦時中やったけど。流れの速い瀬溝せなまを、泳いで渡ったんですよ。それで歩いて日生ひなせに出て、そこから電車で神戸に行っただけです。若い時はまだ元気があったんですね。「おまえそんな行きたかったら逃走して行け！」と職員が言うから、「ああ、ほんだから分かりました」言うて、その通り逃走したわけです。

私が行った時は、神戸は空襲に遭ってつてね。それで私、神戸の高松橋という所まで歩いて行ったら、米軍の赤く塗った艦載機が向こうの川崎造船所の上に爆撃してね。機関銃で打ったりやつとるわけやね。それで川崎工場から高射砲でドンドンやつとるし、もう私も怖くなってね。艦載機が頭の上



長島と本土は思いのほか近い。しかし、時に激しい海流が逃走者を苦しめたという

をガーツと飛んで行きよるし、それで橋の下に隠れて、通り過ぎるまでずつと隠れていました。その時は、父親と妹に会って：ただ会うだけでね。妹はまだ8つか9つで、ほん小さかったですね。ちよつと話をしてそれで帰ってきたわけです。それだけで気が収まったんです。

逃走して戻ってきたら罰を受けるのは確実です。逃走ぐらゐなら案外軽いんですよ。病棟の監禁室というのがあって、外に逃げられんように窓に鉄柵がしてある。そういう所に1週間ほど入れられました。その間も食事はここでは普通に出たように思いますね。ただタオルとか紙とか石鹸とか、そういう配給が1年間停止をくらうわけです。僅かな配給すら切られてしまうので、これは困りましたね。

その後、父親は病気で働けなくなり、妹も若くて生活力が無い。唯一の働き手の私がここにいたから、妹たちの生活は非常に苦しくなるし、この時は本当に悩みましたね。それで「なんとか国の援助を受けるようにできないか」と園長に相談したんですが、「これはなんとかなるで。1回話してみよう」と言ってくれたままで。県の方と連絡が取れなかったのか。今は父親も亡くなつてしまつて。甥っ子と一緒にすつとここへよく面会に来てくれた妹も、3、4年前に亡くなつたからね、今となつてはどうしようもありません。

母親は随分前に亡くなつていたので、今は自分たち（夫婦）だけです。でも、妹に連れられていつも一緒に面会に来てくれた甥が、近いこともあつてちよいちよい来てくれるんですよ、ここに泊りがけでね。神戸で結婚して子ども3人できてるんですけど、子ども連れて来たら、それはもう賑やかですわ。実は甥との養子縁組の話が去年頃から進んでいて、最近その手続きも無事完了しました。

今は県の「里帰り」が楽しみ

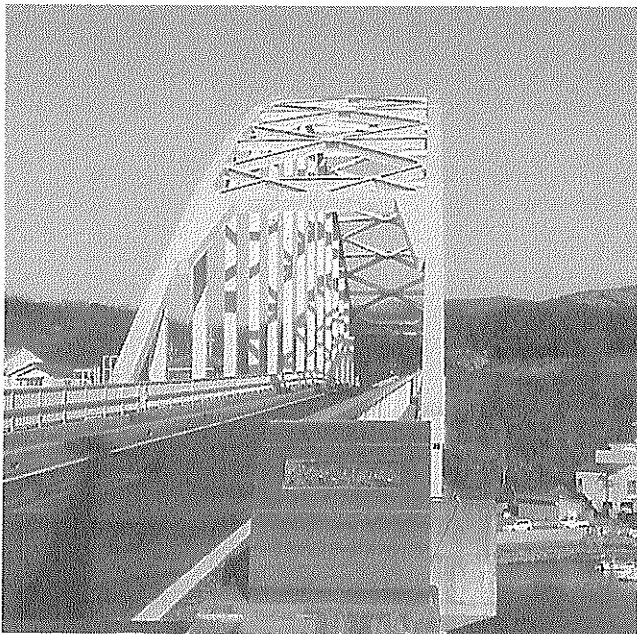
昔の（県の）里帰り（事業）は、一升瓶にお茶を入れて、神社や公園でお弁当を食べたりして。2年に1回もなかったよ。たまにあつたぐらい。最初はこの人（岩本氏）が里帰りに行くのにな、私が付き添いに付けないということ、それで県人会で面倒を見てもらおうと思つて。この人ひとりで行つたんですよ。妹（岩本氏の妹）に会えるのを楽しみにして。でもその時は会えなかつたんやけどね。事前に妹に連絡しておいて、昔は楠公さんの湊川神社で会つたり。里帰りに参加している家族の方が、楠公さんの所まで会いに来るんです。その近くの人はそこで会つたり、公園で会つたりね。でも家族が来なかつた人が多かつたね。私の場合は、もう複雑な家庭やつたからね。小さい時から他所へ預けられてね。そこから病気が出て、こつちへ来たから。両親とは6つの時に別れました。6つから他所に行つたから（親兄弟は）誰も会うことはないですね。でもやっぱり里帰りだけは楽しみやね。自分だけで行くということはどうせんやね。私は和歌山県出身なんですけど、和歌山県も里帰り事業があつて、もう早くから夫婦で一緒に行つてますよ。去年は和歌山県の里帰り、串本へ一緒に行つてきました。

今までで嬉しかった事としては、長島大橋の開通がありま

邑久光明園 岩本洋子さん

（74歳／岩本元寿さんの妻）

すね。これは嬉しかったです。お祝いに夫婦で橋まで行きました。でも、買い物に行きたい時には橋がなかつて、今度行けるようになったら、自分の足の方がね……。みんな年寄りやからね。あの時は、先に亡くなった人たちの事を思つたねえ。長生きしていたら、この橋を渡れたのに……と思いました。



夫婦で開通を祝った邑久長島大橋。本土と長島を繋ぐ「人間回復」の橋である

看護見習から看護される身へ

邑久光明園 木下 一子 さん (81歳/女)

指が曲がらないようになったのは10歳の時でしたが、症状はただこれだけでした。3歳から18歳までの戦災孤児の寮で看護見習として働いていたんですけど、27歳のおりに、子どもたちが疥癬（疥癬虫の寄生によって起こる皮膚病）になつてね。わずらうた子だけタライにね、ムトウハツプのお湯を作つて入れてあげてんけど、なんせ3つくらいの子やから入れてやつても洗うてあげないかんわな。そうしよう間にうつつたんやね。それで、うつつた人は仕方ないけど、今度違う人になつたらいいかんから、県立病院に行つたわけや。ほな「阪大に行きなさい」と言われて行きました。「一般家庭に居るのなら行かんでも良いけど、子どもが居る所だから、このままおるわけにいかん」と言われ、岡山に行くように言われました。寮の園長さんも寮長さんも病院まで付いて来てくれてね。「まあ、岡山へ行けば、そんな悪い所じゃないらしいから。ちゃんとした所やと言うてるから、何も持たんで行つたらいいと言うてますよ」と、ちゃんと聞きに行つてくれた。私は祖母も母も終戦後他界してね、父もどっか戦後のゴタゴタでどこや分からなくなつてね。妹と私、2人が寮にいました。お世話してくださる方があつて、妹は24年に結婚していたので、私も結婚でもするか、一人暮らしなんかしよ

う」と思ったとたんこの病気やと言われたからね。親戚も空襲で皆散り散りバラバラになつていたので、あつさり「行きますわ」言うて来たんです。ここには阪大に一緒に行つてくれた病院の婦長さんが個人的に連れて来てくださったんですよ。強制的に連れて来られたという話を聞きますが、そういうのは全く知りません。私は寮暮らしだったのでこっちに來ても同じようなもんです。本当のこと言うたらね、この『らい』つてどういう病気かということ知らなかったの、迷いはなかったです。それにすぐ帰れると思つたんです。この病気の事を知らないで、どんな所かと思つて来たたら、不自由な方があるし、そりゃあびつくりしましたねえ。それでも、こうして来てしもうたし、妹は結婚してしようどうまいこといつて来る時やつたし、寮に戻るわけにいかんしね。

ここでの生活は、最初は独身寮でした。私はおかげで誰にでも可愛がつてもらいました。「もう来たたら来たで仕方ないわ」と思つてあきらめて、ここで命のある間置いてもらつたら結構やと思つてます。

ここに來てからすぐ、親戚の家を訪ねたことがあるのですが、「どこにいるのか？」としつこく聞かれて困つたことがあります。「岡山に行きました」と言うたら「岡山のどっち

や？」と聞かれました。「岡山のどっち行くんや？」と聞かれたので「岡山駅降りてね、バス乗りますねん」と言う。「バス、どっち向いて行くねん」「どないして行くねん？」と問われ、「終点で降ります」と答えたら、「なんちゅう終点や？」と聞かれました。「鞆の中に入ってますわ。鞆の中の見やんかったら分かりません」とごまかしました。その時、このおばちゃんの前は2度と来れんな」と思いました。「この病気で入りました」と、よう言わなかった。

この間は妹の孫が結婚するというので、結婚式に行つて来ました。その孫が「岡山のおばちゃんに来てもうて」と言ってくれたので、喜んで行つて来ました。妹はその子たちに私の病気の事は言うてないみたいです。竹久夢二の生家の近くに住んで、年金暮らししているということになっています。

私は昭和25年に来て、その年に結婚しました。私は症状が軽かったですけど、夫の方が出られる状態でなかったので、社会復帰のことは考えられませんでした。今は夫が死んで一人になってしまいましたけど、橋ができてからは車を持っている人に乗せてもらつて頻繁に出るようになりました。男舎の空いた所を借りて、そこにミシンがあるんですけど、時々友だちと5、6人寄つて、好きな手芸を楽しんでいます。



「昔は大きな作品を作っていたのですが、最近は小さな人形や携帯ストラップを作っています」(木下さん)



木下さんが親しい人に贈った、お手製の「雀のブローチ」

流転の日々を送った少女時代

邑久光明園 梅津里乃さん（67歳／女）

最初はね、私の父親がこの病気でしてん。それで父親がある日突然いなくなつて。私が6歳かそこらの時でした。家は乾物を扱う商売をしてたから、当時は父親の自転車で一緒に仕入れに行ったりして、そんなようなことでずっと父親に可愛がられていたんだけど、いつの間にか父親がおらんようになつてしましましてん。子どもやったから「またどうせ仕入れやな」と。そしたら急遽、衛生課みたいな人たちが来てはつてね。私なんか家の中に居てただけど、皆家の外に放り出されて消毒されました。私も「外に出ろ」と言われて、ブワッとかけられて、家の中も消毒されました。もうそんな消毒された時点で、近所の人なんか黒だかりになつてるし。

「あそこは『らい病』の出た家だ」とか、田舎じゃすぐ分かりますやん。今思つたら、結局誰かに通報されたわけやね。母親は、母親の実家から親が連れに来て、里に戻つていったようです。家には姉と私が残つてしまい、父方のお婆ちゃんが来ていましたね。お婆ちゃんは自分の里の方と行つたり来たりして生活していました。

それで私が1年生になつた時かな。昭和18年。急に県の担当の人が私と姉を列車に乗せて、長島愛生園に連れて来たんです。病氣じゃないんですよ。未感染児童として。その時は

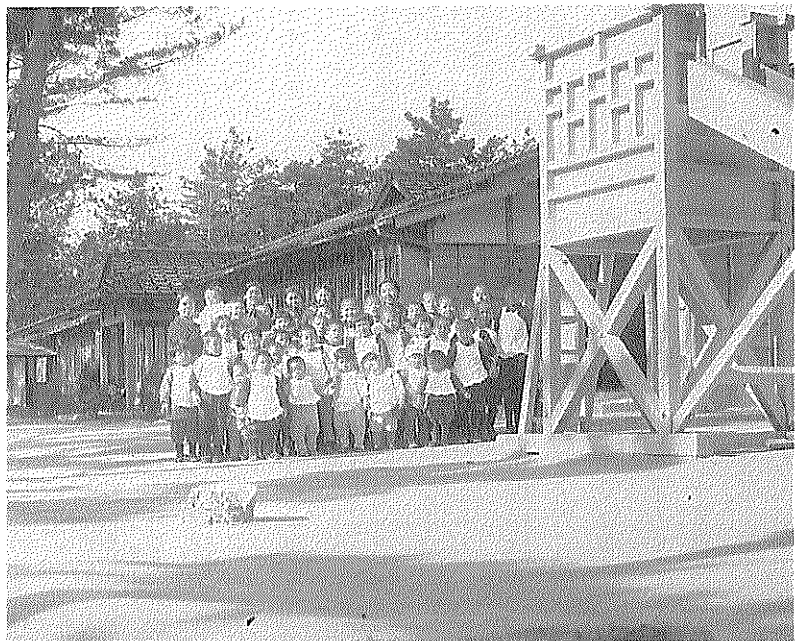
姉が一緒だから心丈夫だったんだけど、お婆ちゃんもついてこうへんしね。知らん人とずつと列車に乗つたり、船に乗つて、それで愛生園に着いて、未感染児童の保育所に入れられました。そこは、親が病氣になつて入所しているなどで連れて来られた、病氣でない子たちが生活するところで。私はまだ1年生やから低学年の方の8畳ぐらいの所に8人くらいが一緒に。学年毎に別々のお部屋でした。皆ひとつの棟に一緒にいるんですけど、姉とは2つ違いですのお部屋が違ふし。今の愛生園の入口の駐車場：あそこに未感染児童の乳幼児らがいましてん。そこから渡り廊下ですつと上が、1年生から中学3年生までの。そこに保母さんがいてはつたり、先生なんかもそこに住んでいたりとか：そういうような状況で皆生活していました。

それで私が4年生の時、未感染児童の学校に居てた時に途中で呼び出されて、「ちよつと上の保育所に来なさい」って。それで行つたら、そのまま中の医局に連れて行かれて。愛生園の児童（患者）を担当している寮の保母さんが医局に居てはつた。そこでバトンタッチですよ。そのまま私は入所。というの、ちよつと4年生になつた時、左手のタカタカ指（中指）が麻痺したり、お尻に白い斑紋（しみ）が出てきたりしたん

です。それで医局に連れて行かれたんでしょね。だから本
当に私の幼少時代は、両親の事もなんやら分からないづくめ
で、今度は知らん所に連れて来られて、知らん人と共同生活。
そしてまた移されて、知らん人と生活せないかん…というよ
うな。品物を扱うように。子どもだから説明しても分から
ないといえはそうかもしれないけれど、「親がこうだから」
とか「こういう理由で」とか全然聞いていないしね。

昭和21年6月に未感染児童の所から園内の寮に移された時
には、私1週間ぐらい泣きましたわ。寮からすぐ上に山があ
るんですけど、そこへ行つて、悲しくて、悲しくて。「病氣」
という自覚はありませんね。「なんでこんなところに入らな
いけんのかな」っていうことだけで。姉と別れたということ
がショックでしてん。「なんで離れないといけんのかな」と。
傍に居ると居てへんっていうのは、うんと違いますやん。
それから姉とはずつと会えない状態だったんですけど、私が
中学生ぐらいになった時かな？ 姉がそーつと来てくれたこ
とがあるんですよ。それが来て5分ぐらいで、すぐサーツと
帰つて。顔を見るだけ。だから、その未感染児童の寮から抜
けて来たということですよ。

父親は、強制収容されて光明園に入っていたんですけど、
私と姉が未感染児童の寮（愛生園）に連れて来られた時には、
光明園を逃走しています。それで愛生園に入っています。私
らがあちら（愛生園）に連れて行かれるから、未感染児童の



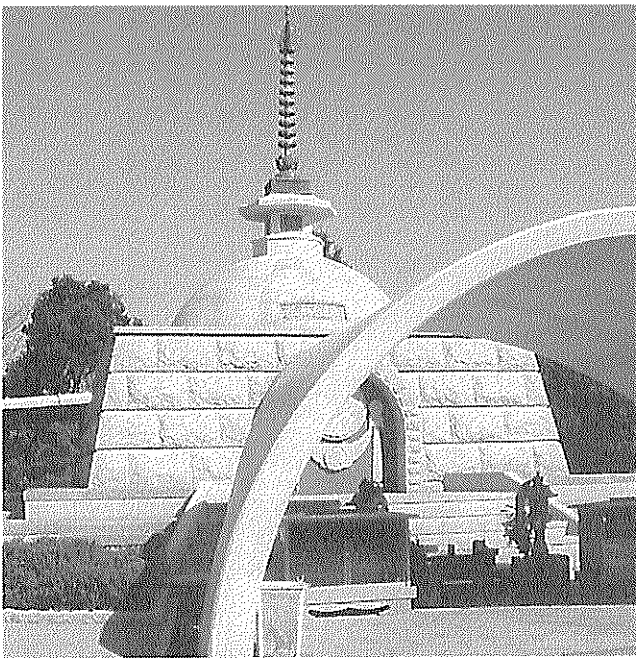
昭和6年～28年まで、
親が入所した場合など
に、その子どもたちが
暮らした、未感染児
童の寮（長島愛生園
自治会提供）

寮が愛生園にあるから：だから移ったんでしょね。その後、昭和19年に愛生園で死んでいますわ。だから家で別れたつきり、会ってしませんわ。父親が亡くなった事は当時知らされていませんでした。「これお父さんのよ。いい着物ばかりあったんやね」って、そと父が入所する時に持ってきていたトランクを見せてもらっただけで。それでなんとなく父親の死を感じたんです。その後、私は鹿児島島の星塚敬愛園を経て、昭和39年に光明園に移りました。

国賠訴訟の裁判の時には、私も原告の一人となりました。原告になるということは、自分の生い立ちも語っていかなくてはいけないでしょ？ それは私のことだからいいんだけど、自分の両親のこともきちつと言わなくてはいけない。それは今まで何十年いうて、「一生涯自分の生い立ちのことは語るまい」と思って生きてきましたし。まさか裁判を起こすということも夢にも思わなかったから。そういうことも含めて考えても「いや、真相はきちつと語らなくては」と。偏見を生み出すようなことを国を挙げてしたっていうことは、やっぱり訴えなくてはいけないということで。私たちはこういう病氣（ハンセン病）を抱えたけれど、それほど嫌われる病氣ではないということ。そういうことも自分が原告になって、らい予防法を読ませてもらって、いろいろ勉強して初めて分かった。「じゃあ、私に出来る事は、やはり自分が人間としての権利を取り戻していくという」、そういうことに自分が

関わっていかなくてはいけない」ということで、自分が原告になって立ち上がったということなんです。

なかなかね、差別・偏見というのは生涯かかっても取り除けるものでもないかもしれない。かといって、手をこまねいてそのままにいるのもいけないことだし。自分たちが体験したことは、「こうなんだ。そうじゃないんだ」と少しづつでも理解から理解を生んでいくとか。そういう働きかけをしなければ分かってもらえないものなんですよ。



姉妹が長島に移った翌年に他界した、父親が眠る愛生園の納骨堂

自分を救った療養所

邑久光明園 藤原 作 夫さん（75歳／男）

病気が発病したのは小学5年生です。11歳です。ちようど右腕の肘から手首にかけての内側に、いわゆる赤斑紋（赤斑）という症状が出たんです。私は農家出身ですから、穫り入れ時期に手伝いをしていてね、それで麦の茎にこすれて赤くなつたんかな、と思つておりましたら：それが最初の兆候ですわね。

光明園は昭和13年4月の開園ですけどね、その頃から兄が傷痕軍人として入所していたんです。その関係で、親はハンセン病はどういうものであるかという、ある程度の知識はありましてね。それで「おまえもハンセン病にかかつたか」と。それから母親が大風子油（オリーブ）の丸薬を入手して、小学5年生から高等科1年の始めぐらいまでは飲みました。それで病気が抑えられていたんですけどね。その後、戦争が激しくなつて、終戦の年の8月頃から病気が進行しまして……。結局、葉がなくなつて飲めなくなつたということ。顔が腫れて、冴えない顔色でした。それである日学校で、3学期の最初の日に「藤原君はどうも病気だから、もう学校に来ないようにしてほしいんだ」とクラスの級長からの申し出があったと、職員室で先生に聞かされて。それから光明園に入園する24年の12月までの約4年間、家の中に隠れ住みました。

23年頃からさらに病気が進行しまして、結節（結核）という症状が

出ました。イボのような結節がずつと隙間なしに出まして、自分で鏡で顔を見て「なんと醜い」と思つたぐらいです。4年間家で隠れ住んだという時期は、「他人とは一切会わない、そういう顔を見られたくない」という思いがありました。そんな苦しい思いをしましたから、ここに入つてきた時は「解放された」という気分でした。当時はまだ隔離政策で、特別な事情がない限りは、療養所から外出できないという方針でした。だけど療養所内でしたらある程度の区域なら自由にどこでも行ける。当時若かつたですから、スポーツは野球部に入れてもらつて、それと海岸に釣りに行つたりね。だからそういうことで「いい所に入れてもらったな」と、これが最初の実感でしたよ。それまで制約された家の中だけの生活でしたからね。

当時の居室は、15畳の雑居部屋で、私が入所した頃は一部屋に6〜7人くらい居たんでしょうかね。それで同室の人が全員そこで生活していたというのではなしに、農園で泊り込む人や、不自由な人の付き添いで泊り込む人もいたの、常時いたのは4〜5人くらいでした。昭和42年頃から個室に換えられて、プライバシーというものが確保されました。35年から「患者が患者を看護するのはおかしい」ということだね。



居室の縁側先に、趣味の盆栽や花の鉢植えが並ぶ風景がよく見られる、光明園の居室風景

同じ年に「不自由な人たちへの看護を患者から職員に切り替えていく」という国の方針があつて、光明園では38年からでしようかね。それで段々と『個室』ということ強く要望してね。でも国がなかなか認めてくれなくて、最初は不自由な人を優先して、6畳の真中を襖で仕切つて、細長い3畳部屋にして。名目上の個室ですけどね。そういう形になったのが39年頃ですか。その後、第一センターという一番不自由な人たちの所が済んで、こちら（第二不自由者棟）に来た時に、初めて4畳半になった。それが42年ですね。それからずっと

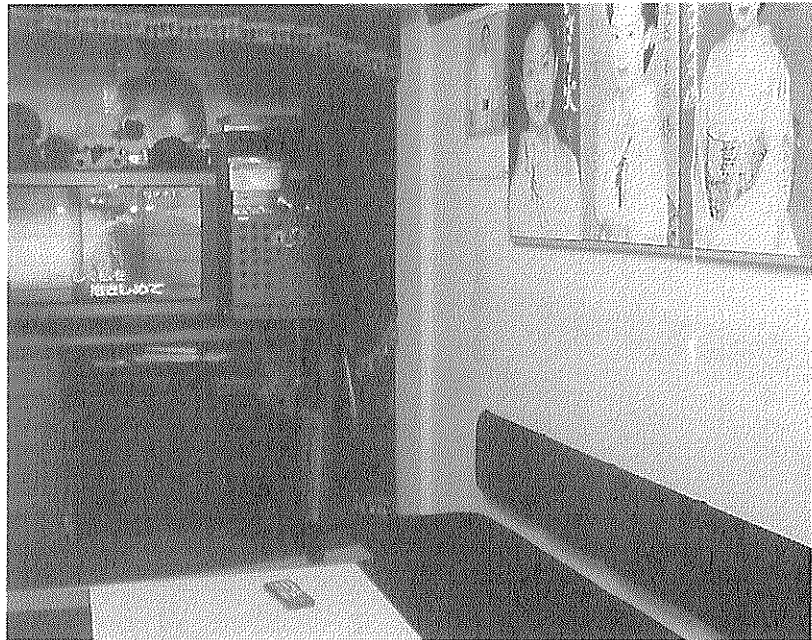
個室化されて、現在に至っているんです。

家族が発病することによって、一番問題になるのは兄弟や親族の結婚問題ですよ。都会の場合は別として、田舎の場合は結婚話が出ますとね、聞き合わせという形で相手の家族が調べるんです。例えば私の姉に結婚話があるとしますよ。そしたら同じ集落の近くに来て、家の家族構成とか色々聞き合わせをするんですよ。近所の人に聞き歩くわけですよ。

そうしますと、大体のことは分かります。そこで「あそこの何はこういう病気で」という話が出ますとね、その縁談はお流れになってしまいます。それと身内にこの病気の者がいることを隠して結婚して、子どももできて幸せな家庭を築いていても、途中で分かつてしまうと、その場で離婚というケースも数多くあると聞いていました。それで、私の場合はね、姉が2つ上でしたけれども、私がおこに來た明るる年に結婚しまして、それは当然隠して……。「弟がこういう病気で療養所にいる」というのは、まったく隠していますよ。隠さなかつたら結婚が上手くいったかどうか分かりませんから。それで3人目の子どもができた時に、「いつまでも隠し切れない」ということで夫に打ち明けたそうです。「隠して悪かった。離婚しようと思つたらしてくれて恨まないから」というようなことを言つたそうです。そしたら「なんでもっと早く言わなかつたんだ。面会に行けるんだつたら、行ってやつたらいいじゃないか」ということで大変理解を示してくれま

して。だから姉婿は「弟がいるということを知っているのに、親族や兄弟が集まる冠婚葬祭に一向に顔を出さないし、不思議だな」と思っておったそうです。それで「こういう所に来れないのは、きっと何か悪さをして、刑務所にでも入っているんじゃないかと思っていた」ということです。そういうことで打ち明けて、理解を示してくれました。昭和40年と45年に帰省した時には、駅まで車で送ってくれたんです。

今、私は趣味としてカラオケをやっているんですけども、平成8年に^{※12}らい予防法が廃止された時点で、岡山県の視覚障害者協会のカラオケ大会に自分たちで、自ら外に出てね。外部の人たちと交流することによって、理解してもらおうと、そういう気持ちになりました。8年から毎年カラオケに参加しているんですよ。らい予防法が廃止された時は、なんか気持ちの上でいっぺんに変わりました。それまではレクリエーションとか^{※13}里帰りのバスツアーなどで外部に出た時にも、見えない法律によって、なんとなく縛られているというんでしょうか。おどおどとした気持ちでしたから。らい予防法が廃止されたということは、私たちとか家族にとっては大変大きな出来事で、「よかったな」と思ってますね。外からのお客さんが入所者との交流を通して、ハンセン病を正しく理解するという目的の研修などで、数多く来られるようになって。交流を通じてハンセン病を理解して頂き、啓発活動がなされているというのが、大変喜ばしいと感じています。



コンテナを改造したカラオケルーム。馴染みのレコード店からもらった歌手のポスターがずらり壁面を彩っている

外島と光明園、社会での生活

邑久光明園 芳山智雄さん（87歳/男）

この病気で療養所に入ると親戚・近所に迷惑がかかるというので、家は2度転居しました。この病気に一旦かかると、何もかも剥奪される時代でした。高砂で家を借りてそこから入院手続きをとって、昭和9年6月に大阪の外島保養院（外島）に入院したんです。それは18歳の時で、理髪職で免状を取っていたので、店を借りてこれからというときでした。斑紋（斑）が出たので、お医者さんに行くと言われたね。後で分かったことやけど、この入院手続きをとると最後までお医者さんに責任がかかるのと、ハンセン病患者が出入りしたということとお客が来なくなるのね。だから、分かったら「県立病院に行け」と言われ、県立病院に行くと言われ、ということになりました。阪大で「間違いないしにこの病気だ」と言われ、紹介状を貰って一番近い外島に行くことになりました。専門のお医者さんやからすぐに治ると思うて「入院さしてくれ」と言うたら、ちよんど増築中でね、まあ、定員よりオーバーしとるということで、家に帰りました。入所までの3ヵ月間というものは、今来るか、来るかと思うとったわけです。そうするとサーベルをさげて警察が来たんよ。町の衛生課の人が来て、「いついつ入院やから用意しておいてくれ」と言ったので、その時はただ普通の入院やと思つとったわけや。ところがやね、さて入院

やいうたら自動車は来とるわ、消毒の散布機もつて来て、そこからじゅう真つ白けで目も当てられんくらいに消毒する。自分か歩いていく後からずつと消毒してくる。加古川の駅からは一列車貸切の、我々の言うお召し列車（お召）に乗りました。

神崎駅、今の尼崎駅に着いたら、ちよんどジープのような形の金網の張つてある自動車が来ていて、その後に私が乗つて、父親は前に乗つて外島保養院に入所。看護婦は、普通の看護服やと思つとつたら予防服着て、そして目だけ出した防護服、ゴム手袋、長靴を履いておつた。診察して、「入りなさい」と言われたので入ったら、ガチャンと鍵を掛けられてしまった。病室に入ると何のことはない、病気の進んだ人たちがたくさん眠つておられる。そこに入ったら自分の身の上を聞かれる。そやけど、同じ病気の者だから安心して話ができる。でなかつたら、この病気だということは誰一人話でけん。隠さんならん。日々病気は進む。そういうことでここに来て、救われた気持ちになつたんや。当時（昭和9年）保養院は450名の定員に615名入院しておつた。私は元氣やから「いろんな作業をしてくれ」と言われ、付き添いとして読み書きできない人の病室に行つて、読誦（とくじゆ）（声を出して読み上げる）こと）してあげる。それがまあ生きがいといつたら生きがいだった。それで、3ヵ月で帰れる

と医者が出たもんだから、他の人に聞いたら笑われたの。「お前、帰れると思うとんか」と。「わしで25年や」「わしは10年や」「わしは15年おる」と。そういう人たちばかりで、一番新しいので5年6年と言う。「それで帰れると思っとんのか。病気は日々進むぞ。お前の見本はあれや」と言うのは、鼻は落ちてる、手はあらへん、足はない、それで喉を切つてカニニューレを入れている。「ああいう風になつていくのがお前の道やぞ」と。そういうなんを見せて、自分は病気になつた時には1回自殺しようと思つていろんなことをやつてみた。ところがどうもでけん。入つてから皆に聞いてみたら、その経験者ばっかしやつた、ほとんど。やはり生かされとると考えな仕方がない。やはり命ある限りはね、「生かされておる」という風に、自分をそのように慰めなしゃあない。宗教に一生懸命になつて題目を唱えて、礼拝堂というのが集会所兼礼拝堂やから、そこへ寄つて初めて話をする。そして聞く。ということがひとつの宗教の慰めですな。入所者が亡くなると男も女もなしに剃髪する。そして棺おけに入れるわけや。その時は外から坊主や牧師を呼んでそれぞれの宗派の葬式を済ませて、それで焼き場で焼くんですけど、それが「部屋回り」いうて、軽症の人たちが順番に火葬の係をします。それがむごい話やけど、丸棺（座棺）やからちよつと燃えへんのやな。だから金棒でぶつ潰すのや、覗き穴から。外島では解剖が義務付けられていたけど、患者自身も自分を提供することで学生の役に立ち、医学的に

役に立つゆうことに喜びを感じていた。献体は、これは当たり前のことや。そういうような形で外島で暮らしておつた。ところが室戸台風が直撃して0メートル地帯だったから波が上を越してきて、建物がベシヤツとへしゃげてしまったんや。それで、私は青年団だから呼集ラツパが鳴つたので、自由舎の人を皆連れて、門を開けて逃げようと思つたら鍵が掛かつていて門を開けてくれないわけや。だから青年団の者が門をぶち破つて、坂を登つて行つた。これが土手ね。坂を登つて行きよつたら途中で土手が切れて、水が田んぼへ流れ込んだんだ。部屋に残つていた命のある者は妙なもので、病棟の薬



室戸台風（昭和9年9月）の被害を受けた直後の「外島保養院」（長島愛生園自治会提供）

布団で寝たつきりの人たちが多かった。藁布団が水で浮き上がったんだな。その上で「助けてくれ」と叫んでいた。わしらは屋根瓦はずして熨斗板破って、助け上げた。昔、川土手には必ず木を植えておつて、その松があちこちに残っていた。その松に食らいつかしたり、電柱に食らいつかしたりして助かったんや。入所者173人を含む187人が犠牲になった。生き残った424人は借りた土地に1カ月のテント生活です。大阪の駅弁を売っているところから弁当を仕入れて毎日弁当を食べていた。テント生活で一步も出たらいかんから。そのうちに長島と大島から巡航船で迎えに来てくれてね、第1班が出て行った。大島青松園と長島愛生園へ行って、それから青森、九州、全生園へと分散した。

私たちは最後のグループで粟生楽泉園(群馬県草津町)に行っただけで、そこは、現在の療養所と同じような自由な雰囲気です。驚きました。外島時代には絶対にそれは許されなかった。ところが草津(粟生楽泉園)ではそれが当たり前のことだった。というのは、草津にはある部落があつて、「この病気は温泉につかると治るから」と、病院で旅館の人が客引きしていたからね。私らは粟生に移つてからは、裏門から出て、「国立の療養所は治療費が要らないから移つてくるように」と始終勧誘に行きました。草津にも遊びに行きましたよ。粟生楽泉園は健常者ともども入つてよろしいというよな、自由がありましたね。東京にちよつと行きたいというときは、届けさえ出

せば、どうぞという形だったから。園内通貨もなかった。

昭和13年に外島の委託患者が邑久光明園に帰園し、私も光明園に移り、14年に仮退所した。脱出ですわ。身内の危篤やとか何とかいうて電報打つてもうて、外に出られるように手筈を整えて医事の方に届けを出すんやけど、医事が「お前、その顔を鏡で見えて来い」と言うわけや。ほんなら「行く」とは言われんわけや。そういうことを医事が言つても当たり前時代のなんやな。それで、正式に仮退院の手続きを踏んで、3カ月待つて仮退院に漕ぎ付けた。

家に帰れば父親が後妻をもろうておつて、家の門を入るときに初めて「実はな、家内がおるねん」と打ち明けられた。実はこの人は結核で、その当時、結核は忌み嫌われた時代で、その家の前を通るときは走つて通つておつた。それで、後妻さんに会つてすぐ「あ、これはあかん。こりゃ3カ月したら駄目だ」と思った。ほなら3カ月したら死にました。可哀想な人で、その結婚前に他人の子どもを2人育て、その子たちが親孝行すると思つたら当て違いやつた。育てて、学校出したにもかかわらず、結核になつたら寄り付きもしない。義娘の方はたまに顔を出しておつたけど、それは私の父親が来る度にいろんなもんやるから、それ目当てに来よつただけや。義息子は葬式やゆうて知らしても来なかつた。

義理の母親の最期を看とつた後、働きに出ました。はじめに市役所に勤めたんや。そこは3カ月でクビや。「何でや？」

と聞きに行ったら、この病気のせいやとは言わへんわけや。課長の所に行っても言わへん。部長の所に行ったら、ニコニコ笑いながら「あんた、分かってるでしょ」と言った。特別伝染病は公職につけないということはきちつと書いてあるねんから。昭和14年に退所してから40年間は療養所とは無縁の生活を送りました。若い頃は用心棒もしたし、いろんなことを経験したよ。職業に就くとゆうたら身元保証人が2人要りますわな。その方に「何で辞めさせられた」「何で辞めた」と聞かれた時にやな、明かされしません、この病気っていうことが。だから、誰にも迷惑かけるまいと思つて生活しようとしたら日雇いしかない。それで日雇いになって、国会議員に働きかけ、日雇いで失業対策事業に就く者に整理番号を与えてくれ」と要求した。その整理番号を与えてもらった者は失業対策を行うのうている場所やったらこの場所に転籍しても、転居してもその日から18日間は仕事を確保できるわけや。そんなことでも、一生懸命働きました。一番長いこと働いたのは製鋼所で、そこには23年勤めとるわ。そこも日雇いで「明日から、お前は本雇いやぞ」と言われて、本雇いになった時に癪癪えんかを起してやな、それでベケになつてしようた。

オバハン(妻)とは「日雇いやから一番その生活をせんなんけど、それでも良かったら来い」と言つて結婚しました。わしにしたら本当に良かった。病気の事はずっと隠してましたけど、「北條民雄の『いのちの初夜』と、それから小川正

子の本を読んだか？」と聞いたたら「読んだ」と言うので、一緒になると同時にここに連れて来たんや。

光明園に再び入所したのは、昭和53年で、2度とここに入りとうなかつたんやけど……。足が立たんようになって医者に行つたけど治らんので、入所手続きをしました。「正式の手続きをしてくれ」と言われ、えらいこつちや、こりやまたあんな目に遭うのか」と思つて自殺しかけたんや。消毒されたり、いろんなことをしたり、近所に知れるし、こりやあえらいこつちやな」と思つて自殺しかかつたんやけど、家内やその頃まだ生きとつた父が気づいたんや。見つかつてしもうたんや。今度は消毒もなしで、担当官と駅で落ち合うて入所手続きをしただけです。2度目やつたから医師の診察はなかつたね。県の担当官と園に向かい、県が寄付した自動車が迎えに来たわ。それで入園したわけやけどな。昔やと大部屋やけど、今は個室やから、オバハンが来て、気楽に物が言えますわな。入所後の家族の生活まで心配してもらつて、家族生活援護という制度があつて、家内が貰つておつたけど、当時病気のことを知らせてなかつた息子がおり、嫁がおるので内緒にせんならん。県から持つてこられるのは困るので貰わんようにした。今は振り込みになつていらしいけど、自分の年金で生活できるようなので貰つていないようです。

2度と入りたくないと思つて自殺まで図つたけど、40年の間に療養所は随分変わりました。

帰りは「神戸」の土産を持って

ケアハウス在住 芳山澄子さん

(88歳／芳山智雄さんの妻)

45歳で結婚することになった時、病気のことには全く知りませんでした。騙されて結婚したんです。知っていたら結婚しませんでした。『らい病』いうたら、伝染病で怖い病気やと思っていたんです。だから、私は女学校の時に『らい病』の人がいて、その人が同じ席をやったので先生に「あの方、らい病という噂があるから席を替えてください」って平気で言いに行つたことがあります。今から思つたら偏見ですけど、それが当たり前前の時代でした。怖い病気やと思っていました。大阪の天王寺とか道端に病気の人がいてたからね、怖い病気やなと思つていたんです。

結婚した時、私には小学3年生の子どもがいました。芳山の母が交通事故で死んで、年老いた父がお炊事に困つていて言うから、そしたらしてあげましょう言うて、結婚しました。その時に「お前にも秘密がありやあ、わたしにも秘密がある。わしはこれだけしかよう稼がんから、お前はお前で食え」と言われました。初めにそう言われて、いまだに生活はそうしています。「橋の下で暮らしてもええか。その覚悟があるんやったら家に来い」とも言われました。

病気のことを知つたのは、ここに再入所する時です。それまでは「こんな気の毒な人がおるから」と言つてこの光

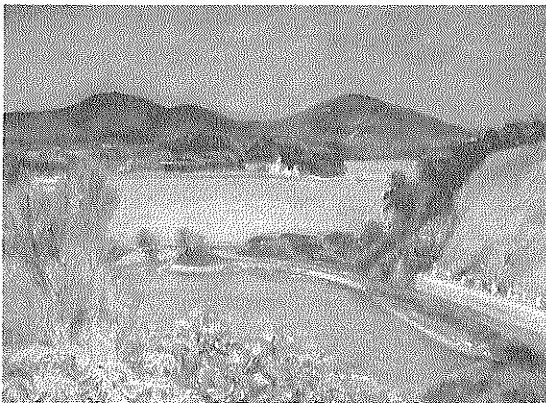
明園に連れて来られていたんです。「日雇いやから一番その生活をせんならんから、一度、それ以上に苦しんでる人の所に連れて行つてやる」と言われて、一緒になると同時に連れて来られました。それから15年、毎年来てますけど、どなたも病気のことには言わないで、内緒にして下さつていたんです。来た時には日生^{ひなせ}でお米やお肉を買つて来て、教会でひと晩泊まつて帰りました。宿泊所というのがなかったですから。何も知らないときに病気のことを聞いたら、結婚しなかったけれども、ここに来るようになって色々分かつて、だから理解ができていたから、それを聞いても別れようとは思いませんでした。他の理由で離婚しようと思ふことはありませんけどね。親切な人なんですけれど口が悪いんですよ。私のことを「オバハン、オバハン」と呼ぶんです。「オバハン」って聞いたら別れようかなと思ひます。「直して欲しい」と言つても「そりや直らん。死ぬまで直らん」と言われてます。それから、部屋の中がいつぱい散らかつているのを見るのも嫌で、離婚しようかと…。性格が違いますからね。だから今のようにな、たまに会うほうが良かったかな、なんて思つたりしますけどね。

今、岡山県内のケアハウスにいてひと月に一回、一週間か10日ぐらい会いに来ています。最初は夫がケアハウスの方に、

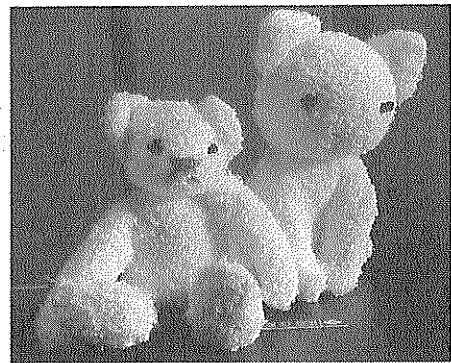


芳山さんの居室を訪れる時に、いつも利用する園内のバス停。片道3時間をかけて、月に1度、芳山さんの居室に通っている

神戸からということでも面会に来てくれていましたけど、友だちが用もないのに「どんな人やる？」と顔を見に来るんです。それで来れなくなつて、私の方が光明園に来るようになりました。今でもここに来るのは「神戸に帰る」とゆうて届けを出してあります。だからこつちに来ている時に、ケアハウスのほうで用事があった時は、神戸の息子たちの住んでいる家に連絡が入つて、神戸からここ、光明園に電話がかかってくる。このことは言えませんがね。病氣のことが分かつたらどんな目に遭うか分かりません。昔と一緒にいる人はいないので、年寄りはおかんです。ケアハウスに来てもらつていたときは手土産は神戸の物でしたが、今、私が光明園から帰るときは神戸から取り寄せたお菓子を土産に持って帰るのです。そうでないと具合が悪いのです。仕方ないですね。



絵画が趣味の澄子さんが描いた、20年前の長島の風景。芳山さんの居室でひと際目を引く存在である。芳山さんの室内には、他にも静物や神戸の風景画など、澄子さんの絵画が、至るところに飾られている



現在、制作中のぬいぐるみ。この後、染色して完成した作品は、園内のキリスト教会のバザーに出品する予定だという